

大坪

—甲府市横根町反田大坪遺跡発掘調査報告書—

1976.3

山梨県遺跡調査団

序 文

甲府市横根町字反田所在の大坪遺跡は、国鉄中央線にまたがって南北に広がっている。面積は広大なもので正確な範囲を把握するのは困難である。

当初集落址が発掘されるものと思っていたものが、調査が進行するに従って遺物の出土状態が、かつて私達の経験したことのない異常とも思われるものであった。それは遺物の粗密が発掘区によつて極端に差があり、黒苔土器、須恵器、灰釉陶器等がほとんど無いことや、十郎器も杯、皿類が主で壺類は無いこと、又土師器の焼成がどれも生焼状態で、黄褐色を呈し、胎土がやわらかいなどの点であった。

遺構は南地区で溝と十郎器集積の堅穴があり、北地区では統計 2ヶ所のみである。遺物の量は南が多く、北は焼土周辺に若干出土したのみであった。しかし、注意すべきは、十郎橋改良工事中に発見された炉穴状ピットからの大量の生焼成土器群である。工事中であったために記録が残られなかつたが、この炉穴こそが遺跡の性格を決定するものとなつた。即ちこの横根、川田町あたりの低湿地は奈良時代以前より平安期に至る土器、瓦等の生産地、あるいはそれに類した地域ではないかと考えられる。

述懐するのは少計かもしれないが、この地域が古代甲斐において、土師器生産という貴重な産業を荷負っていた可能性があることを知っておきたい。又 甲府盆地北側山中にある多数の横石塚群との関係は今後の研究課題としても、この地域の開発作業については充分に留意して行なわなければならないだろう。幸にして今度は極めて緊急ではありながら県土木部の協力を得て記録保存の為の調査を実施することができた。

文末ではあるが調査担当者の菊島美夫氏をはじめ調査に参加された方々、及び、甲府市教育委員会の山村氏や地元の方々には心よく調査に協力していただいたことに深甚なる謝意を表します。

昭和 51 年 3 月 31 日

山梨県遺跡調査團

田 長 井 出 佐 重

凡　例

1. この報告書は甲府市横根町反丘地内の国道140号線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
2. この調査は山梨県知事 吐辺國男を委託者、山梨県遺跡調査団長井出佐重を受託者として昭和50年5月8日より5月31日の間実施された。
3. 本書の作成は菊島、末木、山崎の執筆、トレース、写真、編集により、執筆者名をそれぞれ文末に記した。
4. 出土遺物、実測図は遺跡調査事務局県文化課に保管してある。

目 次

1. はじめに	1
(1) 調査の経過	1
(2) 調査組織	1
(3) 地形と歴史的環境	5
2. 大坪遺跡の概要	5
(1) 南地點	6
(2) 北地點	6
3. 南地点土師器集積遺構	7
4. 遺物	13
(1) 南地点・土師器集積遺構	13
(2) 南・北・十郎橋地點	38
5. 考察	56
(1) 土師器集積遺構出土品の分類	56
(2) タ法量と形態	59
(3) タ 線形方法等について	62
(4) タ 年上に占める位置	63
(5) 大坪遺跡の性格	64

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	大坪遺跡全体図	3・4
第3図	タ　南地点全体図	6
第4図	タ　タ　A—3グリッド	7
第5図	タ　タ　A—4・5グリッド	8
第6図	タ　北地点全体図	9
第7図	タ　タ　A—3グリッド	10
第8図	タ　タ　A—4グリッド	11
第9図	土師器集積遺構	12
第10図	タ　出土遺物	14
第11図	タ	15
第12図	タ	16
第13図	タ	17
第14図	タ	18
第15図	タ	19
第16図	タ	20
第17図	タ	21
第18図	タ	22
第19図	タ	23
第20図	タ	24
第21図	タ	25
第22図	タ	26
第23図	タ	27
第24図	南地点出土遺物 (1)	39
第25図	タ	40
第26図	タ	41
第27図	タ	42
第28図	タ	43
第29図	北地点出土遺物	44
第30図	タ	45
第31図	十郎橋地点出土品 (1)	46
第32図	タ　(2)	47
第33図	タ　(3)	48
第34図	タ　(4)	49

図版目次

図版1	1. 南地点全景（南より）	1
	2. 北地点発掘風景	1
図版2	3. 南A2グリッド土師器集積遺構	2
	4. 同上（南ブロック）	2
図版3	5. 南A2グリッド土師器集積遺構（北ブロック）	3
	6. 南A4グリッド	3
図版4	7. 上師集積出土遺物	4
	8. 南A2グリッド	4
図版5	9. 南A5グリッド	5
	10. 北Aグリッド	5
図版6		6
図版7		7
図版8		8
図版9	A2 土師器集積遺構出土遺物 (1)	9
図版10	A2 土師器集積遺構出土遺物 (2)	10
図版11	A2 土師器集積遺構出土遺物	11
図版12	A2 土師器集積遺構出土遺物	12

大坪遺跡発掘調査報告書

1. はじめに

(1) 調査の経過

昭和50年3月初め、中央線沿いに新設されている国道140号線改良工事現場に於て山本寿々雄、菊島美夫（日本考古学協会員）の両氏は多量の平安時代土師器が出土しているのを発見した。翌日両氏は甲府市及び県教育委員会にこれを通報し、県文化課で現地調査を行なった結果、平安時代の土師式十輪の生産地もしくはそれに等しい様な重要な遺跡であり、特殊な遺構が発見される可能性があるとして、県土木部道路建設課とこの遺跡の発掘調査の打合せを行なった。

遺跡発見時点では、すでに倒溝の工事が着手され、49年度半業で工事が続行中であるため早急な処置が望まれていた。このため菊島ら数名が後に大坪南A2グリッドにあたる遺物集積地区を3月22日から24日の3日間調査し、土師器集積遺構中から復元可能土器約20個と破片百数十点を得た。この他にも遺物集積地が想定されるとして、本調査を実施することとした。

昭和50年5月7日付で山梨県知事印辺國男を委託者、山梨県遺跡調査団長井出佐重を受託者として、昭和56年5月8日より5月30日の間に道路敷内の中央線南北地区の本調査を実施するはこびとなつた。

中央線南は10m×40mのグリッドを設定してこれを全掘し、北側は40m×20mのグリッドを設置し、この中をA、Bのトレンチを設定して調査を実施した。この他に調査中発見された十輪橋（上道140号線）改良工事の土師器集積地点がある。この十輪橋地点は重要な遺構にもかかわらず、工事中で調査が不可能の為、遺物採集のみに終っている。

この大坪遺跡の範囲は広く面積にすれば約10万m²以上になるであろうし、集落址及び農耕地跡まで含めれば恐らくこの付近一帯ということになるであろう。

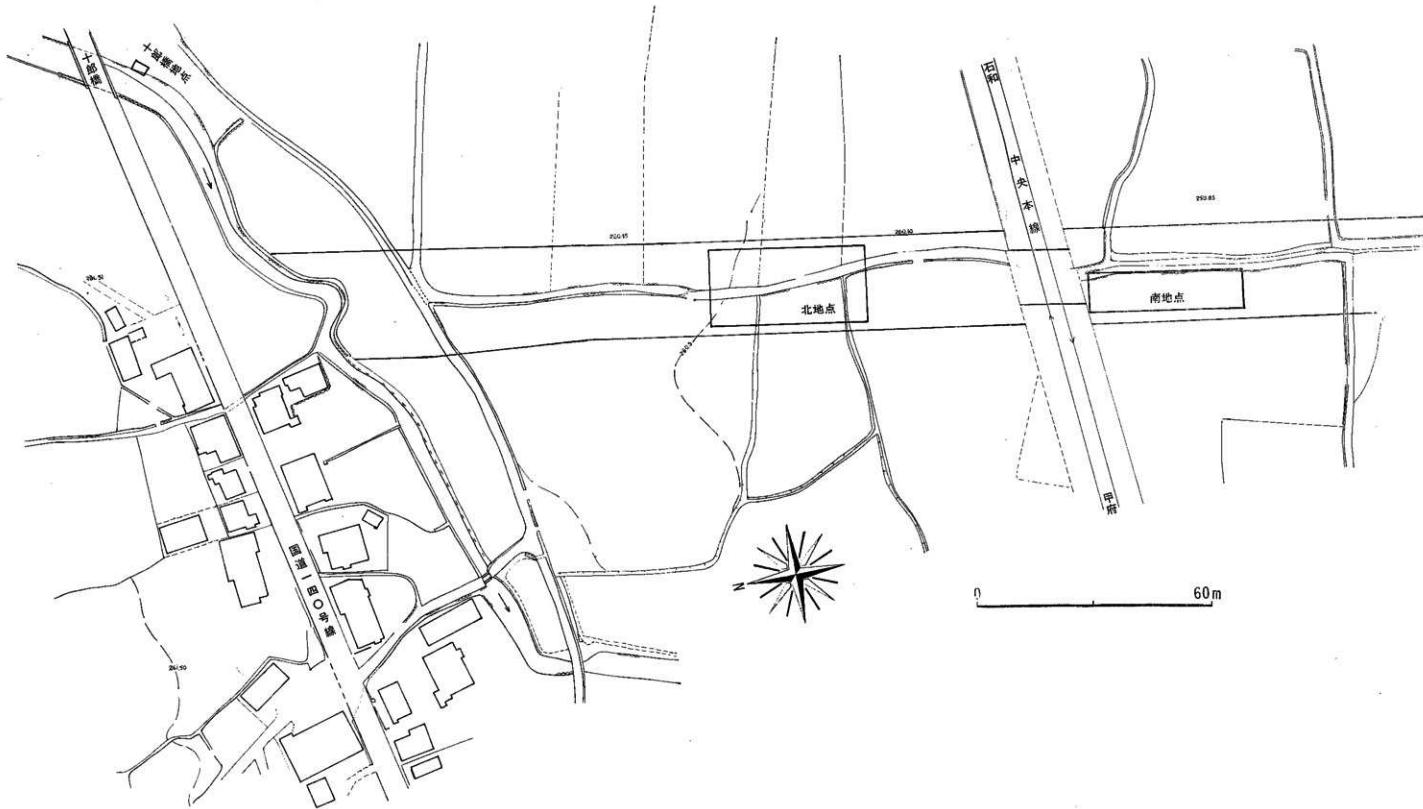
今回の調査では平安時代のものが主であったが、近辺からは古墳時代の遺物も発見され、古墳群も存在するところから古墳時代（6世紀中頃）から人々が居住していたことが判明している。今後の工事に於ても調査は欠かせないものであろう。
(末木)

(2) 調査組織

- ・調査団長 井出佐重 山梨県遺跡調査団長
- ・調査担当者 菊島美夫 日本考古学協会員 山梨県遺跡調査団幹事
- ・調査員 増田泰道・山崎金夫・伊藤恒彦・木木 健
- ・調査補助員 山路恭之助・加藤武美（日本大学）・井川達雄（明治大学）・佐野勝広（法政大学）
　　保坂康夫（広島大学）・北村恵利（御茶水女子大学）
　　磯部厚・大坪宣志・中沢千恵子・高島晋・三原喜士夫・青木直久・梅田均・長山雄
　　平井こづ枝・浅川和子・宮沢秀明・天野正貴・歎野雅彦・志村恵子・三浦一美・山内
　　勉・榎本博・石黒雅春・木間千波・出月洋文・岡崎裕介・栗山保・須玉稔・小沢俊
　　之・植草秀雄・近藤慎之・本間曉美・磯部ゆき江（山梨大学）



第1図 遺跡位置図



第2図 大坪遺跡全体図

- 3 - - 4 -

(3) 地形と歴史的環境

甲府盆地北側に並ぶ山塊が最も盆地に突き出している様な所が、石和駅北側の大藏經寺山（標高715.5m）とそれに遙なる山々である。甲府北側の愛宕山（427.9）と大藏經寺山の間には普光寺の扇状地を形成した高倉川、大円川があり、その東には大山沢川が横根町に流れる。普光寺と横根町の間に中央線酒折駅があって、ヤマトタケルノミコトが東征の帰途立ち止って、火たきの老人と歌の問答をかわしたという伝説のある酒折宮（さかおりのみや）がある。この酒折から国道140号線（青梅街道）と旧国道20号線（現県道平府青梅線）とに山崎三叉路で別れ、青梅街道は山沿いに北東に走る。

大平遺跡は人蔵塗寺山の西麓を流れる大山沢川が横根町に流れ込んで十郎川となった地域で、中央線と旧国道20号、現140号線の間に位置する。標高260m位で、石和、玉堀、甲府にかけてはほとんど平地で、湿気が多く粘土質の土地である。こうした平坦な地域ではあっても、かつてはこの地域を流れる平等川や濁川、信吹川、荒川が蛇行して、自然堤防に数多くの遺跡を残している。その年代は水田農耕が始まった時代、恐らく弥生時代後半位から古墳時代前半以降であろうと思われる。甲府市里吉町近くの東小学校跡からは弥生時代後期の壺及び古墳時代五輪式土器、鬼面式土器や奈良・平安時代に亘る遺物が発見されており、甲府市伊勢町や坪原町からの古墳時代から平安時代に亘る遺跡がある。山梨市までいけば有名な日下部遺跡などもあり、平府盆地中央部の低湿地に向けて弥生時代後期から平安時代にかけて急激な開拓がなされたことが分る。

最近になって分って来たことであるが、平安時代の土器胎土が、全県下、特に匡中地方のものは類似しており、生産地と消費地という関係が想定されるまでになって来た。その生産地が盆地内であり、特に今回の横根、大坪、川井町付近の良質な粘土を使用して製作されたのではないかと推論されるに至った。何故この地域に着目したかと言えば、昭和23年頃中島正行氏が瓦窯址ではないかとして川井町の遺跡について発表している（中島正行・郷土研究6の8 S23年）。この報文では詳細について不明であるが布目瓦等が多量に出上していることは、やはり生産地であることを推定せしめし、国分寺以前の寺と伝えられる寺本鹿寺まで約3K、春日居町国府まで約3K、御坂町国衛まで3K、一宮町团分（团分寺、尼寺）まで約5Kの範囲であり、奈良時代前後の甲斐國の政治、経済的中心地に近くあることや、横根、桜井、菅先寺、等の山腹に積石塚古墳が群積して存在する等も考えあわせれば当時の重要な地域として認識せざるを得ない。なお付言するなら、戰前よりこの付近には瓦屋が多くあり、地域の粘土で良質の屋根瓦を多量に生産しており、又、調査中に発掘した粘土で土器を製作したところ、他の粘土を混入しなくとも、そのまま焼成される良質な土を得ることができた。（末木）

2. 大坪遺跡の概要（第2図）

国道140号線改良工事は140号線と旧20号線を巾20m、長さ約500mで結ぶ新道路建設で、将来甲府バイパス（現20号線）と甲府北バイパスを結ぶ路線の一部である。この中間に鉄道中央線があり、道路は高架で通過するので、便宜上中央線より南を大坪南、北側を大坪北地点とした。なお国道140号線十郎橋南側の土器集落地点を十郎橋地点とし、今回はこの3ヵ所の調査を行なった。

(1) 南地点 (第3, 4, 5図)

甲府市横根町反田が正確な地名であるが、範囲が広く地域的にも分りやすい点から大坪遺跡としたが、このあたりは標高260m前後でほとんど平坦であり、地図はブドウである。畑の中には土師器片が細片となって散布しており、東西200～300mにも広がる。南地点の道路中央には旧農道及び水路がある、この全面調査を行うには七重の関係上困難であった為に、中央西側、3月の時点で一括遺物が出土した地域を中心40m×10mで4mグリッドを設定した。

土層は灰土20m、第Ⅱ層は粘性の強い黒褐色土で粒子がこまかく、Ⅲ層はⅡ層より酸化鉄、砂粒子を含んでⅡより粘性が小さくザラザラした暗褐色土である。Ⅱ層とⅢ層の間に灰白色砂層が薄く入り込んでおり、南にゆくにしたがって厚くなる様である。Ⅳ層は黒褐色粘土層で粒子もこまかく粘性も強い。この下は黒褐色粘土層で砂質の強いものになってくる。こうした七層が標準的なものではあるが、南北では相当異なるものとなっており、工事によって表土が削られている所もある。

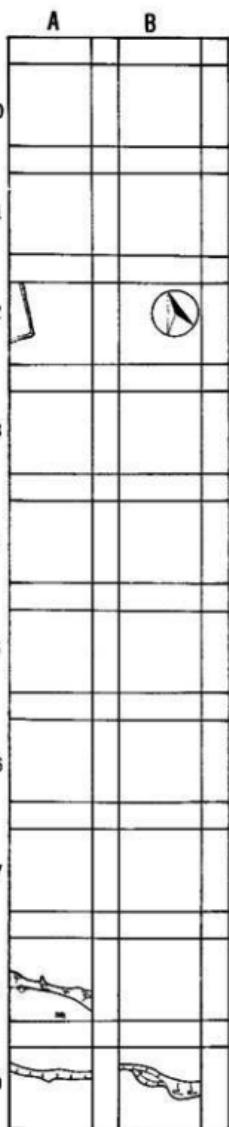
遺構はA2グリッドより土師器集積遺構が、A8, A9, B9グリッドにかけて構が発見されている。B8グリッドは擾乱によって壊されている。これが南地点の遺構の総てであるが、遺物はいづれのグリッドからも出土しており、Ⅱ層とⅢ層の中間に雖然と出土している。

遺物の出土状態についてはA3, 4, 5グリッドの微細図を参照していただければ了解していただけると思うが、一括遺物として把擧されるものであろう。時期的にも問題は無い様である。

溝は第Ⅱ層を切り込んで遺物も若干ではあるが出土している。この性格については不明であるが、V字形に掘り込まれ底部は水が溝ってきたために確認されていない。遺物は土師器杯一括が4～5個、縁付陶器杯破片1個が出土している。

(2) 北地点 (第6, 7, 8図)

中央線北側20m×40mの範囲を調査した。ここも中央に旧農道が走り、この両側をA, Bトレント（グリッド併用）を設定したが南地点よりは全般的に湿度が少なく調査もやや容易であった。



第3図 大坪遺跡南地点全体図

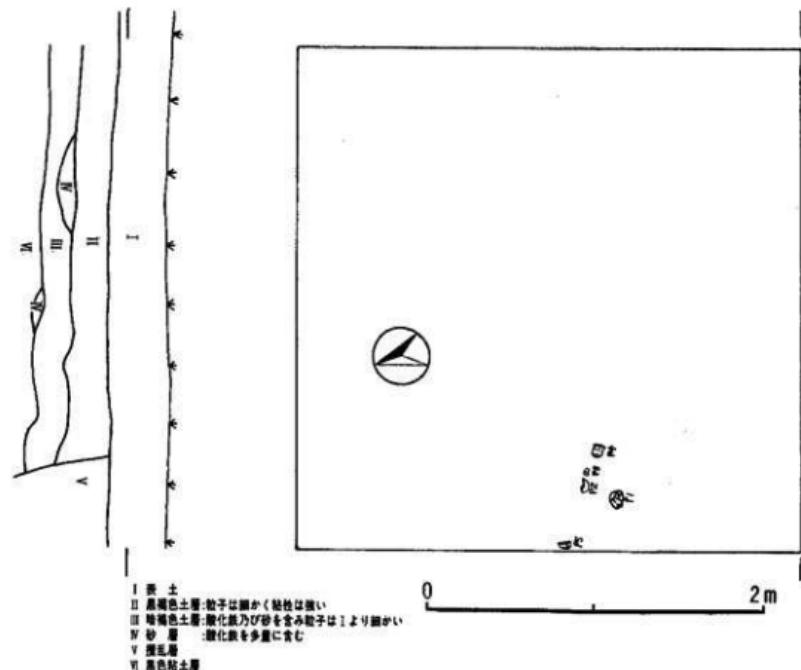
土層は表上が茶褐色土で粒子はやや荒く若干の酸化鉄を含む、II層は黒褐色土で粒子はやや荒く褐色ブロック、酸化鉄を含む、III層は黒色粘土が多く粘性も強い。IV層は黒色粘土層で粒子もこまかく粘性も強い。遺構は明確ではないがA 3 A 4グリッドに焼土ブロックがあり、A 4グリッドの焼土周辺には・掘遺物が5~7個出土している。焼土の範囲は60cm×60cmで、焼土ブロックが30cm×60cmの不整形に広がっている。遺物のあり方等から考えると遺構を伴うことが充分考えられるが、土層固からは明確な結論を得られない。A 3グリッドは1m×1mのほぼ円形に焼土があり断面はレンズ状になっているが遺物を伴なわず不明な点が多い。

(末木)

3. 南地点土師器集積遺構 (第9図)

該遺構は第4層(褐色有機質粘土層)を掘り込み作られており、一部は下層の第5層(黒褐色粘土層)まで達している所も見られ、深さ約30cmを計る。西側を破壊されているので全貌は確認できないがあたかも略穴住居址の如き形態を呈する。遺構南壁の略中穴あたりに厚さ10cm~15cmで第4層がカマボコ状に残存している。底は褐色有機質粘土(一部に黒褐色粘土)の単一層であり、この時代の住居址床面に通有的に見られるローム+黒色土を踏みしめた様なものでなく、水分を多量に含み極めて軟弱ものである。焼土等は見られなかった。

遺構は遺構北部に長さ0.9m、巾0.3m、厚さ0.3mの範囲(北部ブロック)と、南壁の中央部にカ

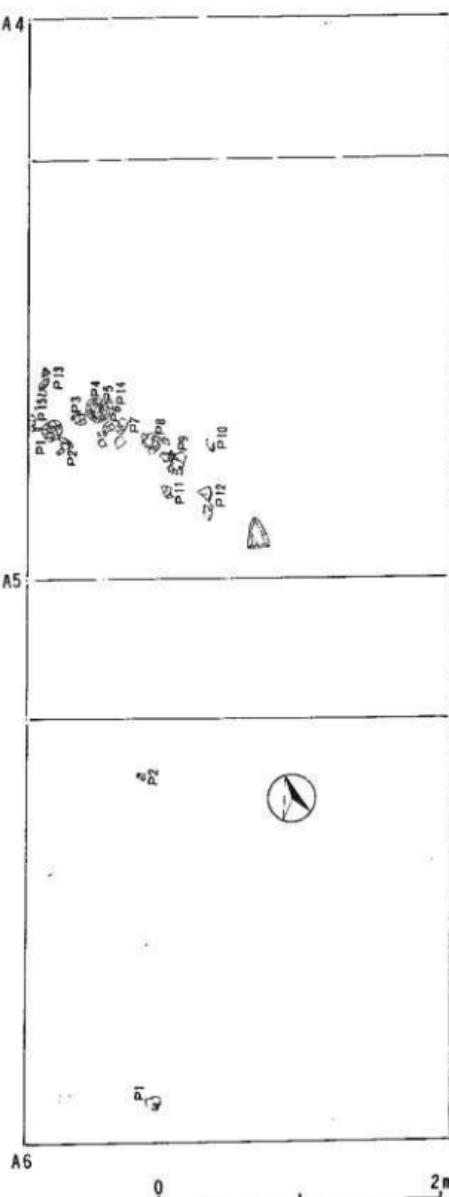


第4図 大坪南地点A 3 グリッド

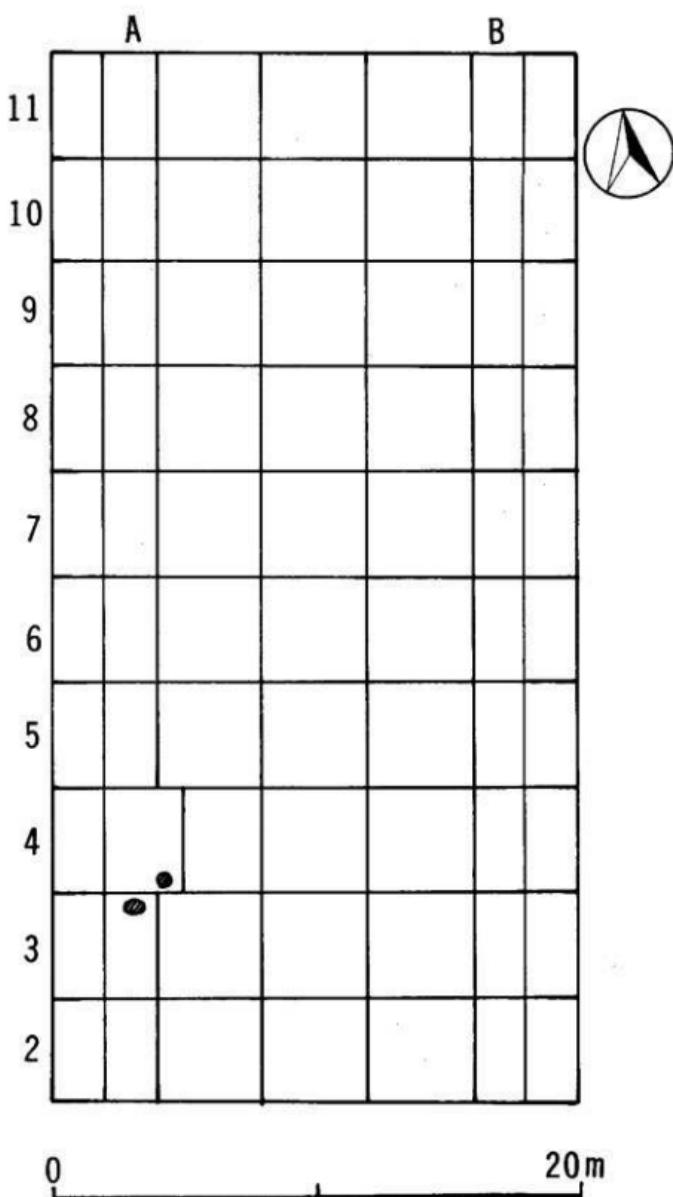
マッシュ状に残存する褐色有機質粘土層上に長さ0.6m、巾0.3m、厚さ0.2mの範囲（南部ブロック）の2ブロックを中心として、遺構内より出土しており、遺構外の出土例は僅かであった。

北部ブロックの出土状況は、遺物が亂雑に投げ捨てられた如くであり、遺物に亀裂の入ったものや船底の剥落したものが多く目につき、復元できるものは小さかった。一方、南部ブロックは、図版9の様に遺物が積み重ねられたものを、何列かに並べた如くの状況を呈し、亀裂の入ったものや、船底の剥落したものは少なく、出土品のほとんどが、復元可能なものであった。

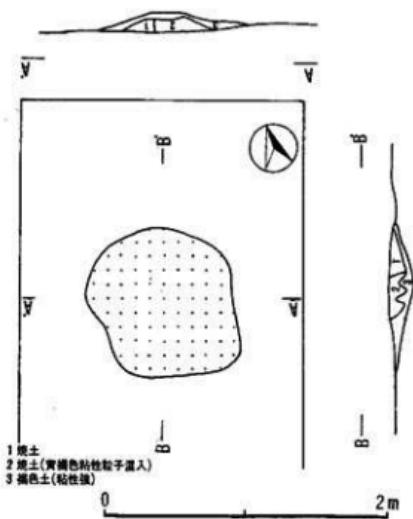
（山崎）



第5図 大坪南地点A4. 5グリッド



第6図 大坪北地点全体図



第7図 大坪北地点A3グリッド

A5

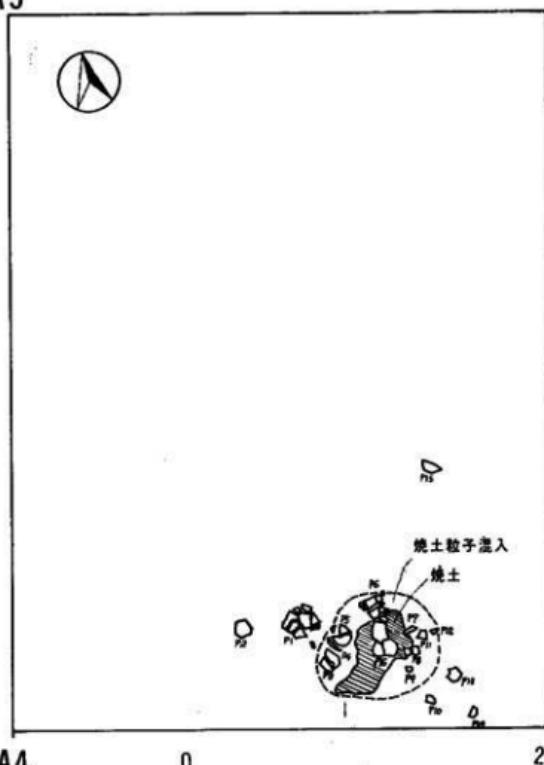
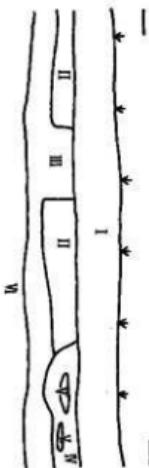


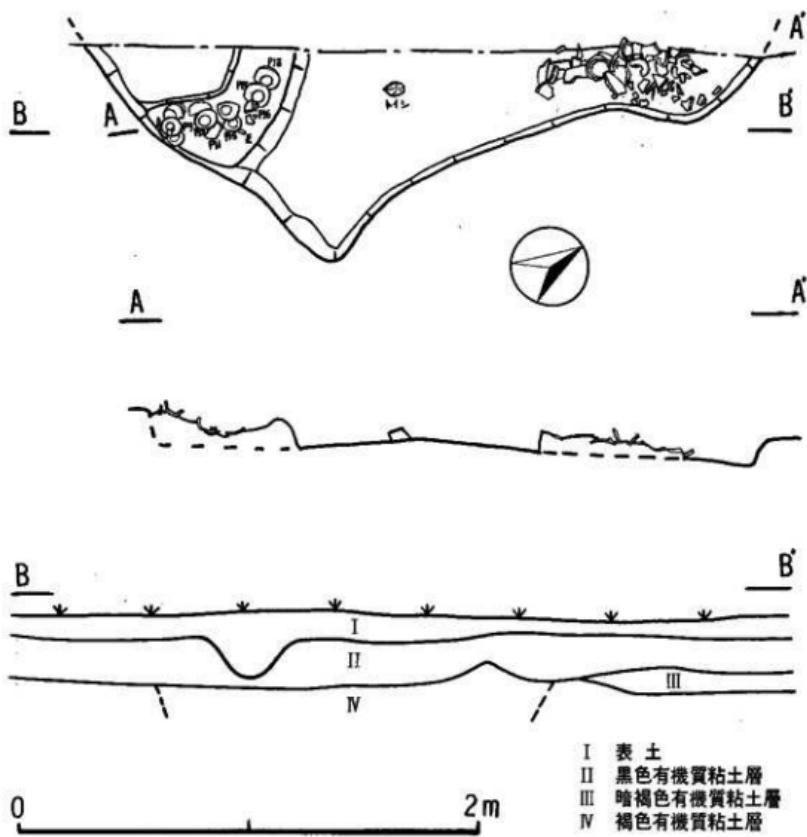
A4

0 1 2m

第8図 大坪北地点△グリッド

- I 茶褐色土層：粒子はやや粗く若干の酸化鉄を含む
- II 黒褐色土層：粒子はやや粗く若干の酸化鉄・褐色・brookを含む
- III 黑褐色土層：IIより粒子は細かく褐色粘土を含む
- IV 黑褐色土層：粒子は常に細かくbrookを含む
- V 烧土層（黒色）





第9図 土器集積遺構

4. 遺 物

(1) 土師器集積遺構

該遺構出土の遺物は、前述のとおり、南・北ブロックを中心に出土しているが、両ブロック出土品の様相は異なっている。北部ブロックからは上師器では皿形土器、杯形土器、甌形土器、鉢形土器、片口形土器、黑色土器（皿、杯形土器）、この外に須恵器や瓦などが出土しているが、圧倒的に上師器が多い。土師器の中でも、出土総数の半数以上を皿形土器が占め、次に黑色土器が多く、杯形土器は以外と小量であった。

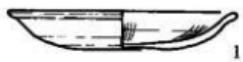
一方、南部ブロックよりは、土師器と瓦のみが出土して、その99%は土師器類であった。土師器の器形は杯形土器、甌形土器、小形甌形土器が見られるが、後二者は各1点づつで、残りは絶て杯形土器で占められている。

南部ブロックは、北部ブロックに比べ、集積状況の違いの外にも皿形土器が極端に少なく、黑色土器に至っては全く皆無という様に出土遺物に於いても様相を異にして検出された訳である。この違いが何由生じたかは明確にしがたい。

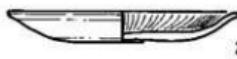
この外、同遺構からは砾石が一点検出されているが、鉄器類は全く検出されていない。

更に、出土状況と言う訳ではないが、北・南両ブロックおよび遺構内より出土した遺物は、もちろん、外のグリッドより出土した遺物からも、全く「墨書き」の遺存例が認められなかった点、該遺構の性格を暗示するものと考えられる。

（菊島）



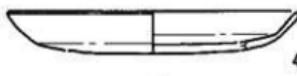
1



2



3



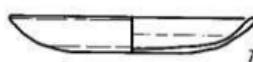
4



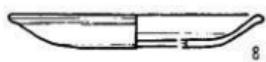
5



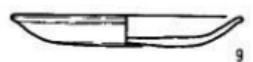
6



7



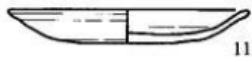
8



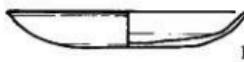
9



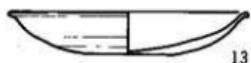
10



11



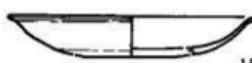
12



13

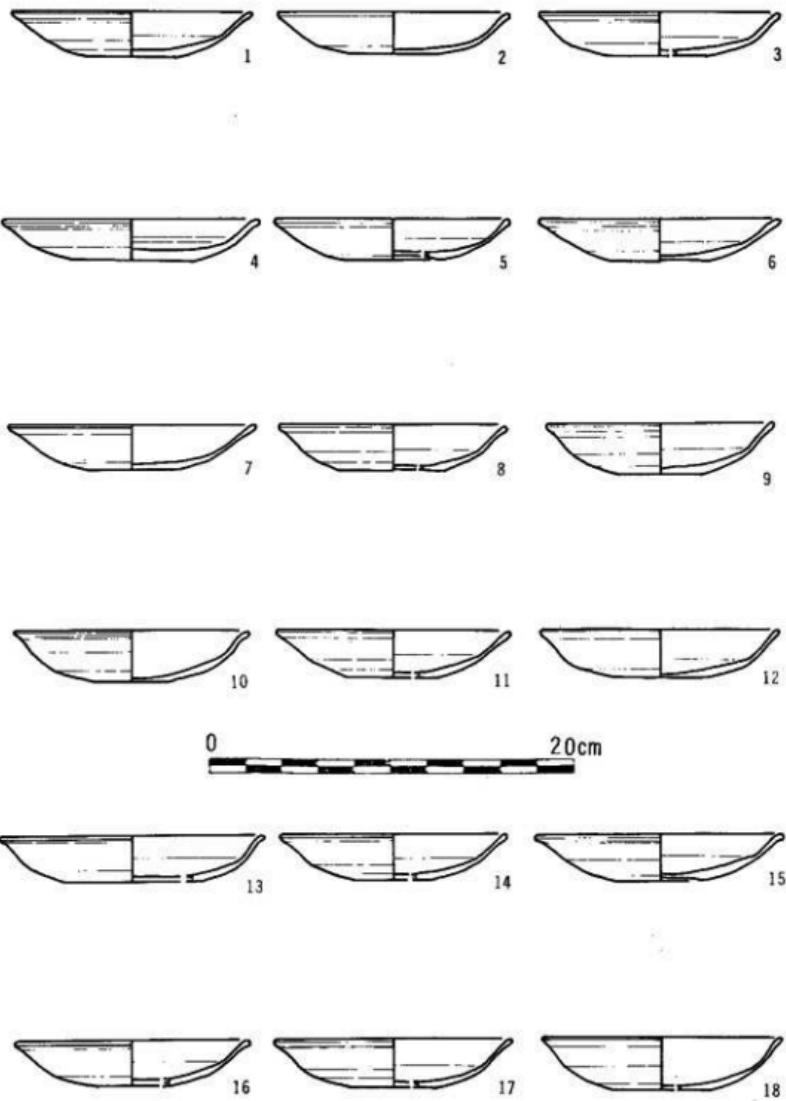


14

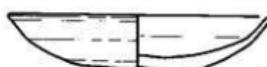
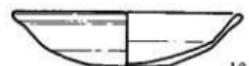
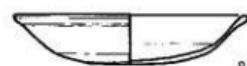
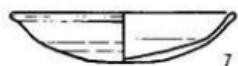
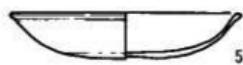
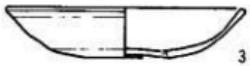
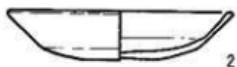
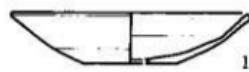


15

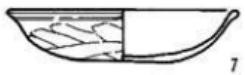
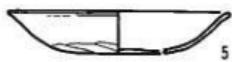
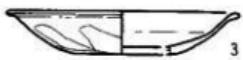
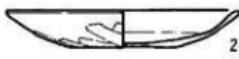
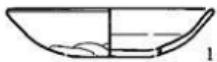
第10図 土器集積造構



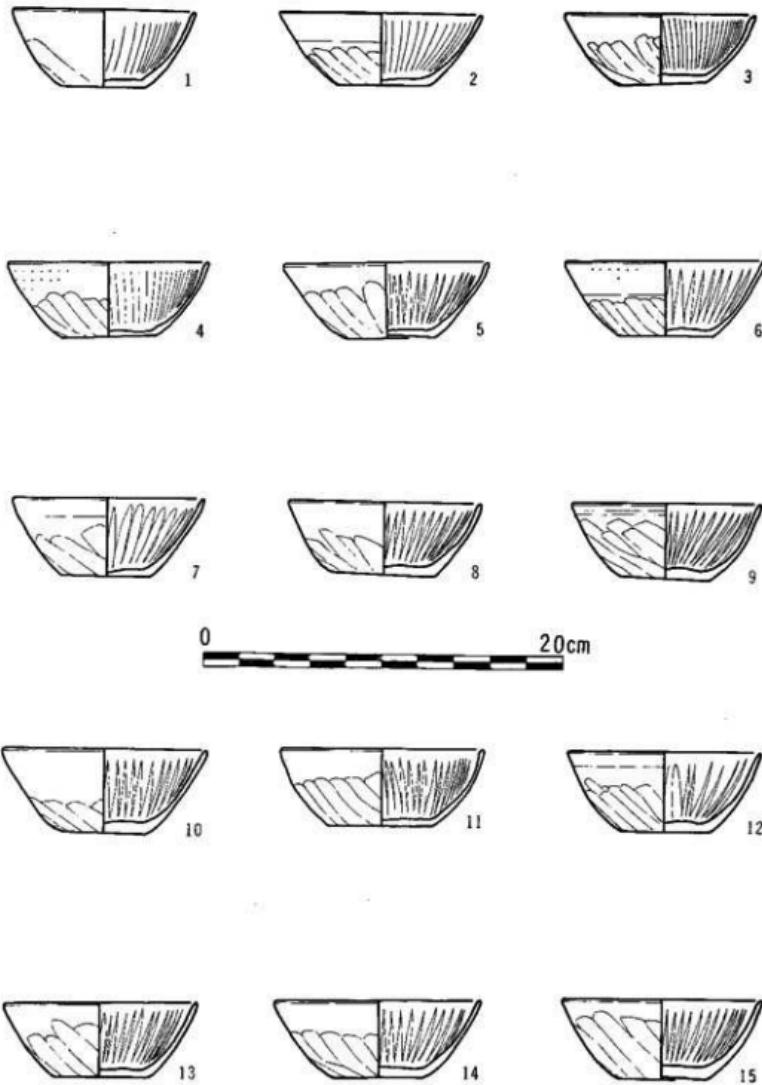
第11図 土師器集積遺構



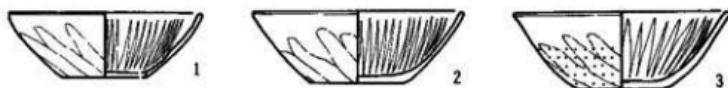
第12圖 土師器集積遺構



第13圖 土師器集積遺構



第14圖 十五件集積遺物



1



2



3



4



5



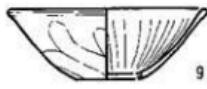
6



7



8



9



10

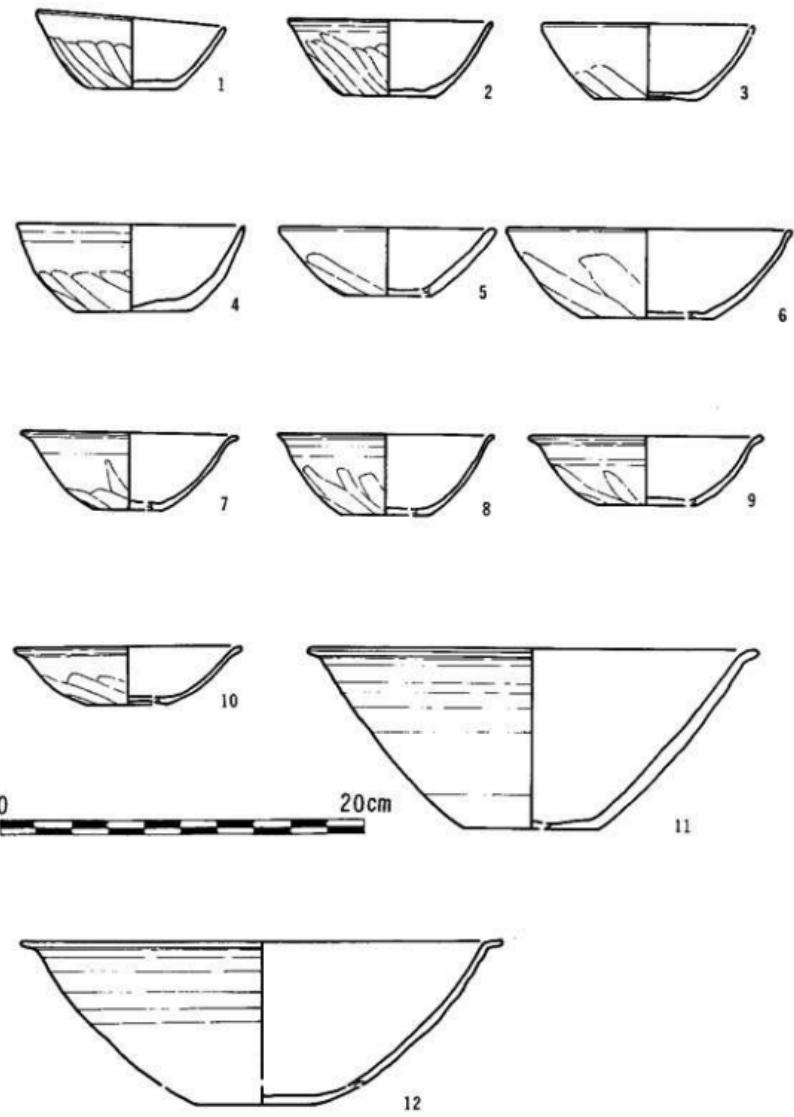


12

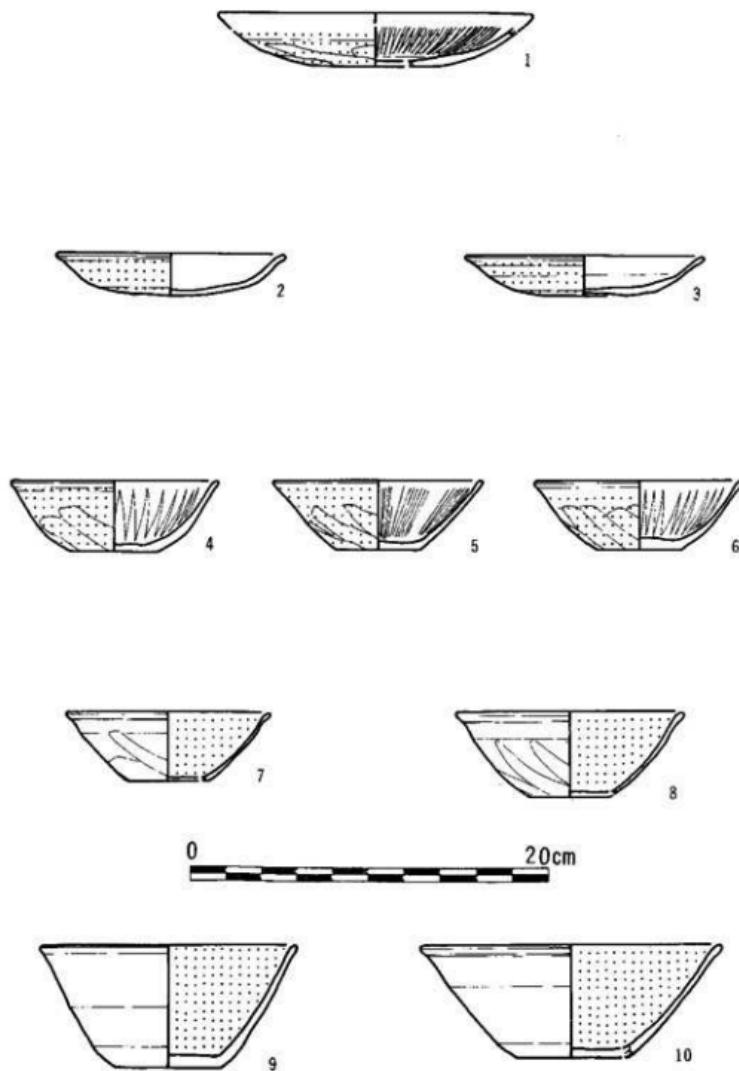


11

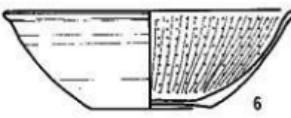
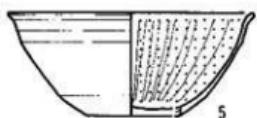
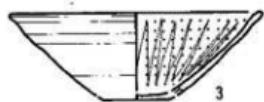
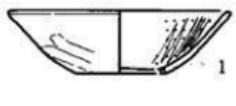
第15圖 土師器集積溝



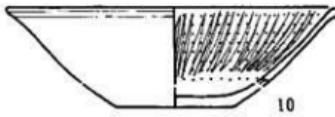
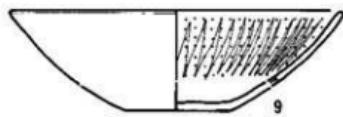
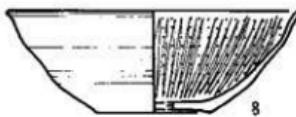
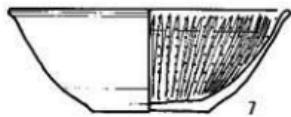
第16圖 上海器集橫遺構



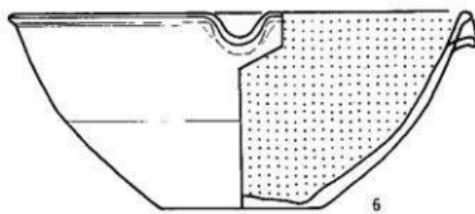
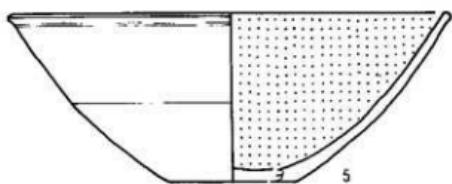
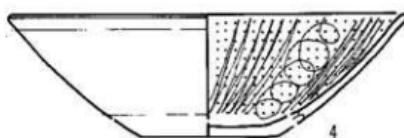
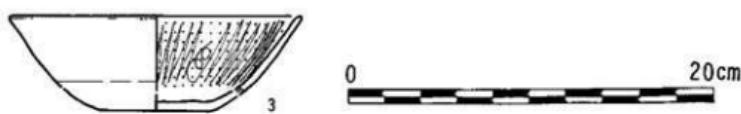
第17図 上筋器集積遺構



0 20cm



第18圖 土師器集積遺構



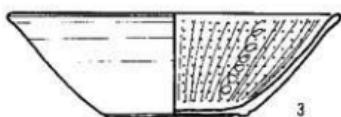
第19図 土師器集積遺構



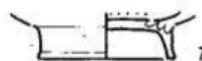
1



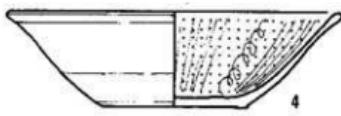
2



3



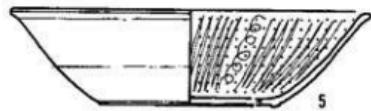
7



4



8

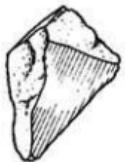
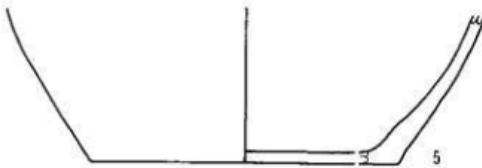
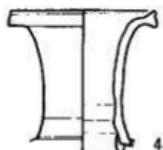
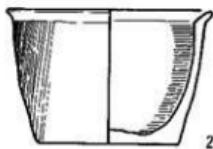


5

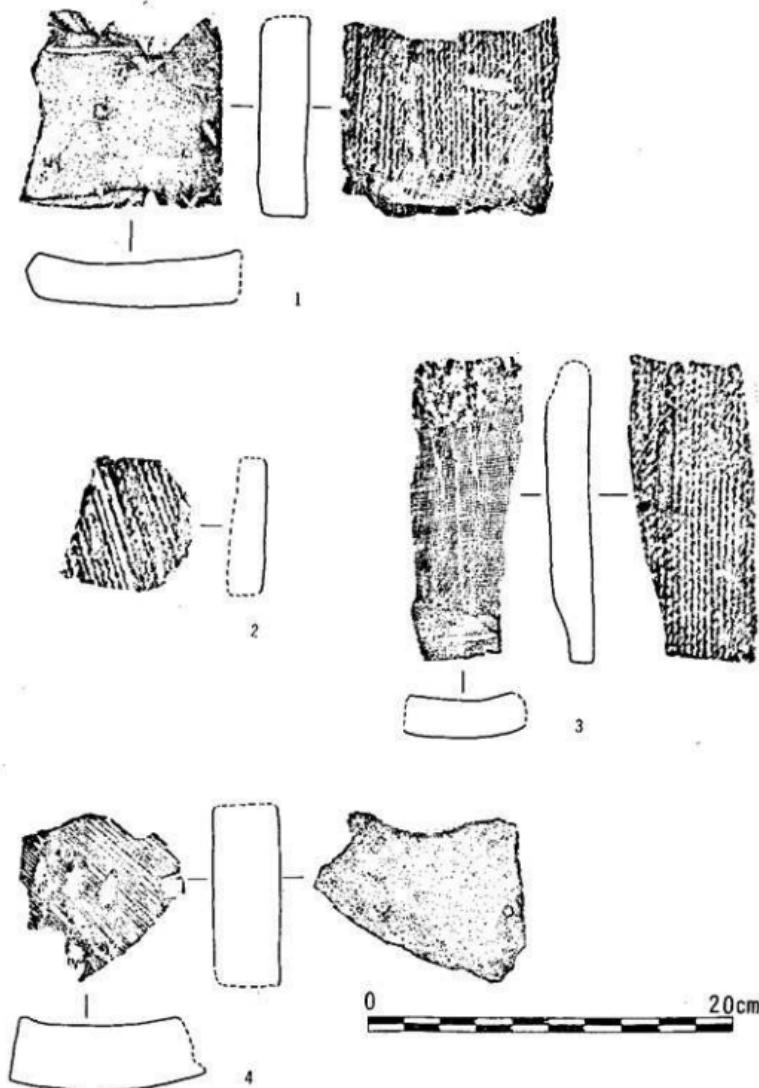


6

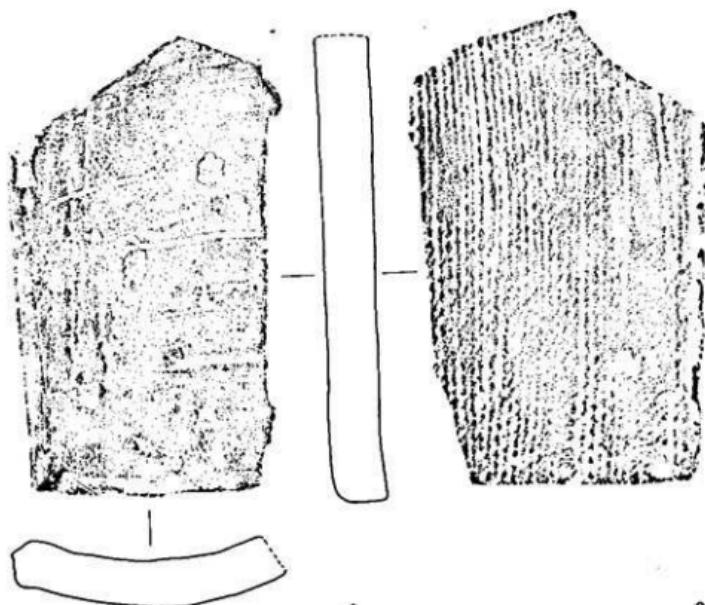
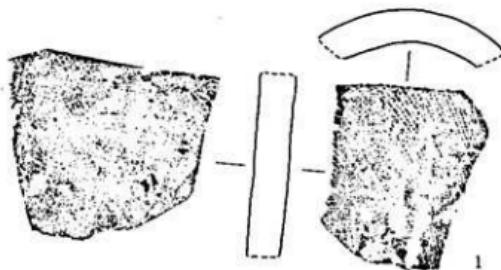
第20圖 土師器集積遺構



第21図 土師器集積遺構



第22図 土師器集積遺構



0 20cm

第23図 上部器集積遺構

表1 大坪遺跡 南地区(上部器集積遺構)

岡面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	器量			形
					山径器高	底径	口縁	
第10図1 北部ブロック		ブロック状に乱雜に堆積	土師器	皿	128	21.5	46	玉縁 外反 西放射状底脛が一文字様に入る
2	ク	ク	ク	ク	130	17	52	ク 放射状底脣
3	ク	ク	ク	ク	204		半唇	放射状底脣の間に ら歯状底脣が入る
4	ク	ク	ク	ク	164(24)		尖唇	→ 鏡面
5	ク	ク	ク	ク	140	21	60	ク
6	ク	ク	ク	ク	134	19	46	玉縁 外反 → 鏡面
7	ク	ク	ク	ク	138	20	70	ク
8	ク	ク	ク	ク	142	19	62	ク → 鏡面
9	ク	ク	ク	ク	130	17	40	ク
10	ク	ク	ク	ク	138	16	60	ク
11	ク	ク	ク	ク	134	19	48	ク
12	ク	ク	ク	ク	136	20	51	ク ク
13	ク	ク	ク	ク	134	24	50	ク
14	ク	ク	ク	ク	140	20	50	ク
15	ク	ク	ク	ク	138			→ 鏡面
第11図1	ク	ク	ク	ク	132	25	50	ク
2	ク	ク	ク	ク	128	23	44	ク → 鏡面
3	ク	ク	ク	ク	134	24	52	ク
4	ク	ク	ク	ク	131.5	23	64	ク → 鏡面
5	ク	ク	ク	ク	130	23	52	ク
6	ク	ク	ク	ク	134	23	52	ク → 鏡面
7	ク	ク	ク	ク	136	25	48	ク
8	ク	ク	ク	ク	126	25	58	ク → 鏡面
9	ク	ク	ク	ク	126	28	46	ク
10	ク	ク	ク	ク	130	28	42	ク
11	ク	ク	ク	ク	130	26	50	ク
12	ク	ク	ク	ク	132	27	50	ク
13	ク	ク	ク	ク	146	25	74	ク → 鏡面
14	ク	ク	ク	ク	126	25	44	ク
15	ク	ク	ク	ク	136	26	44	ク
16	ク	ク	ク	ク	130	25	38	ク
17	ク	ク	ク	ク	132	27	46	ク → 鏡面
18	ク	ク	ク	ク	132	28	54	ク
第12図1	ク	ク	ク	ク	134	28	52	ク

方	法	底	部	胎	土	焼成	色 内	調 外	備 考
④ロクロ横ナデ	○放射状窓唇が	△	回転窓唇	赤色スコリア	±石英	堅 固	灰褐色	褐色	片
→ 窓 唇	十文字線になる								
ク	放射状窓唇	ク	ク	ク	ク	やや軟弱	褐色	ク	ク
ロクロ横ナデ						堅 固	赤褐色	ク	ク
ロクロ横ナデ	→ 窓 唇			ク	ク	ク	褐色	褐色	ク
			回転窓唇前	ク	ク	ク	黒褐色	出褐色	○黑色土器か
ク	→ 窓唇	ク	ク	ク	ク	ク	褐色	灰褐色	ク
ク		ク	ク	ク	ク	やや軟弱	灰褐色	褐色	ク
ク		ク	ク	ク	ク	堅 固	褐色	灰褐色	ク
ク	→ 窓唇	ク	ク	ク	ク	ク	褐色	暗褐色	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	やや軟弱	ク	褐色	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	堅 固	ク	灰褐色	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	暗褐色	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	褐色	ク	半完
ク	ク	ク	ク	ク	ク	やや軟弱	ク	褐色	ク
ク	→ 窓唇	ク	ク	ク	ク	堅 固	灰褐色	灰褐色	ク
ク		ク	ク	ク	ク	ク	暗褐色	黑褐色	○黑色土器か
ク	→ 窓唇	ク	ク	ク	ク	ク	褐色	褐色	片
ク		ク	ク	ク	ク	ク	ク	灰褐色	ク
ク	→ 窓唇	ク	ク	ク	ク	ク	褐色	ク	完
ク		ク	ク	ク	ク	ク	ク	灰褐色	黒褐色 ○黑色土器か
ク	→ 窓唇	ク	ク	ク	ク	ク	暗褐色	褐色	片
ク	→ 窓唇	ク	ク	ク	ク	ク	褐色	褐色	半完
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	褐色	片
ク	→ 窓唇	ク	ク	ク	ク	ク	褐色	ク	外の一部に出色部分有
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	灰褐色	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	暗褐色	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	褐色	褐色	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	灰褐色	ク
ク	→ 窓唇	ク	ク	ク	ク	ク	灰褐色	ク	ク
ク		ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク		ク	ク	ク	ク	ク	褐色	褐色	ク
ク		ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	→ 窓唇	ク	ク	ク	ク	ク	灰褐色	灰褐色	ク
ク		ク	ク	ク	ク	ク	褐色	褐色	ク
ク		ク	ク	ク	ク	ク	灰褐色	灰褐色	ク

表 2

図面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量			整形	
					口径	底径	高さ	口縁	底縁
第12図2 北部ブロック	ブロック状に乱雜に堆積		土師器	皿	126	27	40	玉縁	外反
3.	タ	タ	タ	タ	134	28	48	タ	タ
4.	タ	タ	タ	タ	134	29	56	タ	
5.	タ	タ	タ	タ	130	26	38	タ	
6.	タ	タ	タ	タ	124	26	46	タ	
7.	タ	タ	タ	タ	126	27	42	タ	→ 露磨
8.	タ	タ	タ	タ	130	28	48	タ	
9.	タ	タ	タ	タ	118	31	38	タ	→ 露磨
10.	タ	タ	タ	タ	128	30	46	タ	
11.	タ	タ	タ	タ	128	33	34	タ	
12. 南部ブロック	積み重ねられた杯形 上端最上部より出土			タ	146	30	60	タ	
第13図1 北部ブロック	ブロック状に乱雜 に堆積		タ	タ	116			タ	→ 露磨
2.	タ	タ	タ	タ	128	21	56	タ	
3.	タ	タ	タ	タ	130	24	56	タ	
4.	タ	タ	タ	タ	130	26	44	タ	
5.	タ	タ	タ	タ	128			タ	
6.	タ	タ	タ	タ	134	30	52	タ	
7.	タ	タ	タ	タ	128	28	52	タ	→ 露磨?
8.	タ	タ	タ	タ	136	28	60	タ	
第14図1 南部ブロック	積み重ねられたブ ロック状で出土		杯	102	43	46	尖唇	放射状露磨	
2.	タ	タ	タ	タ	113	40	52	タ	タ
3.	タ	タ	タ	タ	107	39	48	タ	
4.	タ	タ	タ	タ	113	42	52	タ	
5.	タ	タ	タ	タ	115.41.5	48	タ	花弁状露磨	
6.	タ	タ	タ	タ	112	42.5	52	タ	
7.	タ	タ	タ	タ	108	44	49	タ	
8.	タ	タ	タ	タ	108	40.5	57	タ	
9.	タ	タ	タ	タ	106	42	48	タ	
10.	タ	タ	タ	タ	114	46.5	44	タ	
11.	タ	タ	タ	タ	114	43	56	タ	
12.	タ	タ	タ	タ	108	45	48	タ	
13.	タ	タ	タ	タ	108	41	52	尖唇	タ
14.	タ	タ	タ	タ	115	43	48	タ	
15.	タ	タ	タ	タ	111	44	49	タ	

方 法 部		胎 土		燒 成		色 調 外 内		備 考	
ロクロ横ナデ → 錠 剤	回転錠剤	赤色スコリア 右英	やや軟弱 石英	堅 固	夕	灰褐色			片
タ		夕	夕	夕	夕	褐色	夕		夕
タ		夕	夕	夕	夕	褐色	夕		夕
タ		夕	夕	夕	夕	夕	夕	外部に黒色	夕
タ		夕	夕	夕	夕	暗褐色			夕
タ	→ 錠 剤	夕	夕	夕	夕	赤褐色	赤褐色		夕
タ		夕	夕	夕	夕	灰褐色	褐色		夕
タ	→ 錠 剤	夕	夕	夕	夕	夕	灰褐色		夕
タ	夕	夕	夕	夕	夕	褐色	褐色		半完
タ		夕	夕	夕	夕	夕	灰褐色		片
タ		夕	夕	夕	夕	夕	褐色		夕
ロクロ横ナデ ・ 錠 剤		夕	夕	夕	夕	夕	夕		夕
タ	系切後周縁 1 ~ 1.5cmを窓剤	夕	夕	夕	夕	夕	灰褐色		夕
タ	窓	夕	夕	夕	夕	夕	灰褐色		夕
タ	全面窓剤調 整	夕	夕	夕	夕	夕	夕		夕
タ		夕	夕	夕	夕	夕	褐色		夕
タ	全面窓剤調 整	夕	夕	夕	夕	夕	灰褐色		夕
タ		夕	夕	夕	夕	夕	褐色		夕
タ	系切後半を 窓	夕	夕	夕	夕	夕	夕		夕
ロクロ横ナデ ・ 錠 剤	系切後周縁 1 ~ 1.5cmを窓剤	夕	夕	夕	夕	夕	夕		夕
タ		夕	夕	夕	夕	夕	夕		完
タ		夕	夕	夕	夕	夕	夕		半完
タ		夕	夕	夕	夕	夕	夕		夕
タ		夕	夕	夕	夕	夕	夕		完
タ		夕	夕	夕	夕	夕	夕		夕
タ		夕	夕	夕	夕	夕	夕		夕
タ	窓剤(同心円状)	系切後全面 窓	夕	夕	夕	夕	夕		夕
タ	系切後周縁 1 ~ 1.5cmを窓剤	夕	夕	夕	夕	夕	夕		夕
タ		夕	夕	夕	夕	夕	夕		片
タ	系切後全面 窓		夕	夕	夕	夕	夕		夕
タ	系切後周縁 1 ~ 1.5cmを窓剤	夕	夕	夕	夕	夕	夕		完
タ		夕	夕	夕	夕	夕	夕		片
タ		夕	夕	夕	夕	夕	夕		半完

表 3

器皿番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法 異			整 形	頭
					口徑	底径	高さ		
第15図1 挖削溝内									
1	タ	タ	土師器	杯	108	36	48	尖唇	花弁状範唇
2	タ	タ	タ	タ	118	40	52	タ(玉縁に近い)	タ
3	タ	タ	タ	タ	120	43	49	タ(タ)	タ
4	北部ブロック	ブロック状に乱雑に堆積した出土	タ	タ	114	41	42	玉縁外反	タ
5	タ	タ	タ	タ	116	40	40	タ	タ
6	タ	タ	タ	タ	112	42	40	タ	タ
7	タ	タ	タ	タ	107	39.5	46	タ	タ
8	タ	タ	タ	タ	120	43	48	タ	タ
9	タ	タ	タ	タ	112	39	36	タ	放射状範唇
10	タ	タ	タ	タ	160			タ	花弁状範唇
11	タ	タ	タ	タ	108	44	58	尖唇外反	ダ円状範唇
12	タ	タ	タ	タ			72		
第16図1 南部ブロック									
1	タ	積み重ねられたブロック状で出土	タ	タ	104	39	46	尖唇	
2	タ	タ	タ	タ	113	42	49	タ	
3	タ	タ	タ	タ	118	41	56	タ	
4	タ	タ	タ	タ	126	48	62	タ	
5	北部ブロック	ブロック状に乱雑に堆積した出土	タ	タ	120	37	48	丸唇	
6	タ	タ	タ	タ	160	50	76	玉縁外反	
7	タ	タ	タ	タ	120	42	36	タ	
8	タ	タ	タ	タ	120	46	48	タ	
9	タ	タ	タ	タ	130	39	54	タ	
10	タ	タ	タ	タ	126	32	40	タ	
11	タ	タ	タ	鉢	250	100	74	丸唇外反	
12	タ	タ	タ	タ	268			タ	
第17図1									
1	タ	タ	タ	皿			70		花弁状範唇
2	タ	タ	タ	タ	128	23	40	玉縁外反	→範唇
3	タ	タ	タ	タ	134	22	46	タ	タ
4	タ	タ	タ	杯	116	40	46	タ	花弁状範唇
5	タ	タ	タ	タ	118	39	46	タ	放射状範唇が三方に入る
6	タ	タ	タ	タ	118	38.5	46	タ	花弁状範唇
7	タ	タ	タ	タ	114	39	44	タ	
8	タ	タ	タ	タ	128			タ	
9	タ	タ	タ	タ	114	69	56	タ	
10	タ	タ	タ	タ	170	(44)(60)		タ	

方	法	部	胎	土	焼	成	色	調	内	外	體	考
ロクロ横ナデ → 鑿 剤	同心円状鋸削	全面 鑿 刷	赤色スコリア 石英	堅 固	褐 色	灰褐色						片
タ	同心円状鋸削	全面 鑿 刷	タ	タ	タ	タ						タ
タ		タ	タ	タ	タ	タ	褐色					タ
タ		鑿	タ	タ	タ	タ						タ
タ		全面 鑿 刷	タ	タ	タ	タ						半完
タ		鑿	タ	タ	タ	タ						片
タ		全面 鑿 刷	タ	タ	タ	暗褐色						半完
タ		鑿	タ	タ	タ	褐色						片
タ		タ	タ	タ	暗褐色	タ						タ
タ		タ	タ	タ	褐色	褐色						タ
ロクロ横ナデ → 鑿 剤	同心状鋸磨	削出高台 鑿削 →同心状鋸削	(タ(密度良))	タ	タ	タ						タ
				タ	タ	タ						環
ロクロ横ナデ → 鑿 剤		全面 鑿 刷	タ	やや軟弱	タ	タ						半完
タ		系切溝周囲 1 ~ 1.5cmを鏽削	タ	タ	タ	タ						片
タ		タ	タ	タ	タ	タ						タ
タ		全面 鑿 刷	タ	堅 固	タ	タ						完
タ		鑿	タ	やや軟弱	タ	タ						片
タ		タ	タ	堅 固	タ	タ						タ
タ		タ	タ	タ	灰褐色	灰褐色						タ
タ		タ	タ	やや軟弱	タ	タ						タ
タ		タ	タ	堅 固	褐色	タ						タ
タ		タ	タ	タ	灰褐色	褐色						タ
ロクロ横ナデ		回転 鑿 刷	タ	タ	タ	タ						タ
タ			タ	タ	褐色	赤褐色	黑色土器					タ
ロクロ横ナデ → 鑿 剤	同心円状鋸磨	鑿	タ	タ	黑色	黑褐色	タ					タ
ロクロ横ナデ → 鑿 剤	→ 鑿 磨	回転 鑿 刷	タ	タ	暗褐色	黑色	タ					タ
タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ		タ
ロクロ横ナデ → 鑿 剤		全面 鑿 刷	タ	タ	褐色	褐色	黑色					タ
タ		タ	タ	タ	タ	タ	黑色					完
タ		鑿	タ	タ	褐色	褐色	黑色					片
タ		タ	タ	タ	黑色	黑褐色	タ					タ
ロクロ横ナデ → 鑿 剤		全面 鑿 刷	タ	タ	タ	褐色	褐色	タ				タ
ロクロ横ナデ → 鑿 剤			赤色スコリア 石英	タ	タ	褐色	タ					タ

表 4

国面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量			整	形
					口径	底面	高さ		
第18図1	北部ブロック	ブロック状に乱雜に堆積した出土	土器	杯	122	35	50		四
2	タ	タ	タ	タ	140	54	40	尖唇	花弁状底唇が十字字縦に入る
3	タ	タ	タ	タ	140			玉縁外反	花弁状底唇
4	タ	タ	タ	タ	162	46	60	タ	花弁状底唇が十文字縦部に窓唇
5	タ	タ	タ	タ	136	58	50	タ	タ
6	タ	タ	タ	タ	160	53	68	タ	花弁状底唇(「文」字)
7	タ	タ	タ	タ	156	56	62	タ	口縁部に窓唇
8	タ	タ	タ	タ	162	56	62	タ	花弁状底唇
9	タ	タ	タ	タ	184			丸唇	花弁状底唇
10	タ	タ	タ	タ	184			玉縁外反	花弁状底唇
第19図1	タ	タ	タ	タ	152			丸唇	花弁状底唇(十字字)
2	タ	タ	タ	タ	146			玉縁外反	花弁状底唇が入る
3	タ	タ	タ	タ	162			丸唇	花弁状底唇、ら継状底唇
4	タ	タ	タ	タ	220			タ	花弁状底唇(「文」字)
5	タ	タ	タ	鉢	244	93	70	平唇	花弁状底唇
6	タ	タ	タ	片口	254	107.5	88	タ	底部近くに窓唇
第20図1	タ	タ	タ	杯			70		花弁状底唇(十字字)
2	タ	タ	タ				64		にら継状底唇入る
3	タ	タ	タ	タ	184	59	84	玉縁	タ
4	タ	タ	タ	タ	186	53	82	タ	タ
5	タ	タ	タ	タ	200	52	98	タ	タ
6	タ	タ	タ	タ			70		
7	タ	タ	タ	タ			76		
8	タ	タ	タ	タ			84		
第21図1	タ	タ	タ	杯蓋	166				
2	南北ブロック	積み重ねられて杯形土器直上より出土	小型甕	114	74	78			御状観
3	北部ブロック	ブロック状の乱雜な堆積した出土	甕	288					タ
4	タ	タ	須磨漆	長颈甕	80				ロクロ
5	タ	タ	タ	甕			168		タ
6	タ	タ	タ	甕			106		タ
7	南北ブロック の中間あたり	母独	石器	砥石					
第22図1	北部ブロック	北部ブロック土器 底より洗って出土	瓦	平瓦					
2	タ	タ	タ	タ					
3	南部ブロック	杯に混って出土	瓦	平瓦					

方 部		法 部		胎 土	焼 成	色 調 内 外	備 考
④ロクロ横ナデ → 篦削		④		堅 固		黒色土器	
タ	円心状窓磨の 中に曲線磨削	回転磨削	赤色スコリア 石类	タ	黑色	褐色	タ
ロクロ横ナデ → 篦削		タ	タ	タ			タ
タ		タ	タ	タ	タ	タ	半完
タ		鋸	タ	タ	タ	次褐色	片
タ		タ	タ	タ	タ	タ	完
タ		回転磨削	タ	タ	タ	タ	半完
タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	完
タ			タ	タ	タ	タ	片
タ			タ	タ	タ	タ	タ
タ			タ	タ	タ	タ	タ
ロクロ横ナデ → 篦削			タ	タ	タ	タ	タ
ロクロ横ナデ → 篦削			タ	タ	タ	タ	タ
タ			タ	タ	タ	タ	タ
タ			タ	タ	タ	タ	タ
タ		回転磨削	タ	タ	タ	タ	タ
タ	円心状窓磨の中 に十文字の窓磨	削出高台		タ	タ	タ	片
タ	タ	タ		タ		赤褐色	タ
タ		タ		タ		灰褐色	タ
タ		タ		タ		タ	半完
タ		タ		タ		タ	片
タ	円心状窓磨の中 に「文字の窓磨」 (糸切痕を) (を残す)			タ	タ	タ	タ
放射状窓磨		脚付		タ			縫
			タ	タ		タ	タ
				タ			片
↓ 横状窓	木の葉底			タ			半完
タ				タ			片
ロ ク ロ				タ			環
タ				タ			片
タ				タ			タ
						粘板岩製	完
				堅 固	内面布目外面織糸目		
				タ		タ	片
				タ		タ	タ

表 5

断面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量			整形	
					口径	器高	底径	剖	部
第22図4	北部ブロック内	より混って出土	タ	平瓦					
第23図1	廻削溝中	表 採	タ	丸瓦					
2	タ	タ	タ	平瓦					

方 部	法 部	胎 土	焼 成	色 調		備 考
				内	外	
			堅 岡			外面布目内面織糸目片
			タ			タ タ
			タ			タ タ

(注) 1. 矢印(→↖)は窓剤の方向を示す。

2. 全面窓剤、糸切後周囲1~1.5cm窓剤とあるは、すべて静止窓剤のものであり、前者は全く糸切痕を残さず、後者は糸切痕を残すものである。

3. 窓のみ記入するものは窓であるが、回転窓剤、静止窓剤いずれか判明しないもの。

4. 窓剤とあるは、暗文と同語。

(2) 南・北・地点および十郎橋地点

大坪南地点で一括出土したA2グリッド土師集積遺構内遺物は、考収で詳細に分析されているので他のグリッド出土の遺物をここであつかう。遺物の量は概して内側のAグリッドに多く、A2, 3, 4, 5, 7, 8に集中している。特に4, 5, 8は多く、一括出土しているが遺構との関連が明確ではなく、一括遺物として捉えられるのはきりしないので、上器の整形技法によってこれを分けた。南地点出土遺物は第24図～第28図であり、一部表採品も含まれる。第24図1～3は奈良時代から平安時代に移行する時期のものと考えられ、外口縁は横ナゲ、胴から下はヘラなどで整形される。口縁先端は1は内湾、3は外傾し尖る特徴は真間期のものに近いと考えられる。4～26は外面胴部下半にヘラ削が見られるもので、口唇外反玉縁を呈するものが多く、外傾、外反の程度で分類することができるかもしれない。27, 28, 29は前述の遺物に先行し、かつ1～3以降に位置する。45, 46は標式とする皿は、底部円形ヘラ削が施され、胴部がくの字に屈曲するものである。黒色土器56～64の中最も古いものは56で外面ヘラみがき、内面黒色で口縁部内面が2と共通する。65は縄釉陶器で帆海窯のものと思われ、胎上黃白色である。これは溝中の出土で溝の掘削年代を決め得る資料であろう。71, 73は高杯脚部である。特に注意しなければならないのは73である。県下に於ける出土例はこの遺跡の数例の破片を除いて皆無の状態である。長野県内でも例を知らないが、この脚は畿内に見られる外面をたてに大きくなっている。高い脚をもつ高盤のそれであろうか。もしそれだとするなら、畿内の盛行時期が8～9世紀であり、これに伴出する遺物の略年代が知れようと思う。

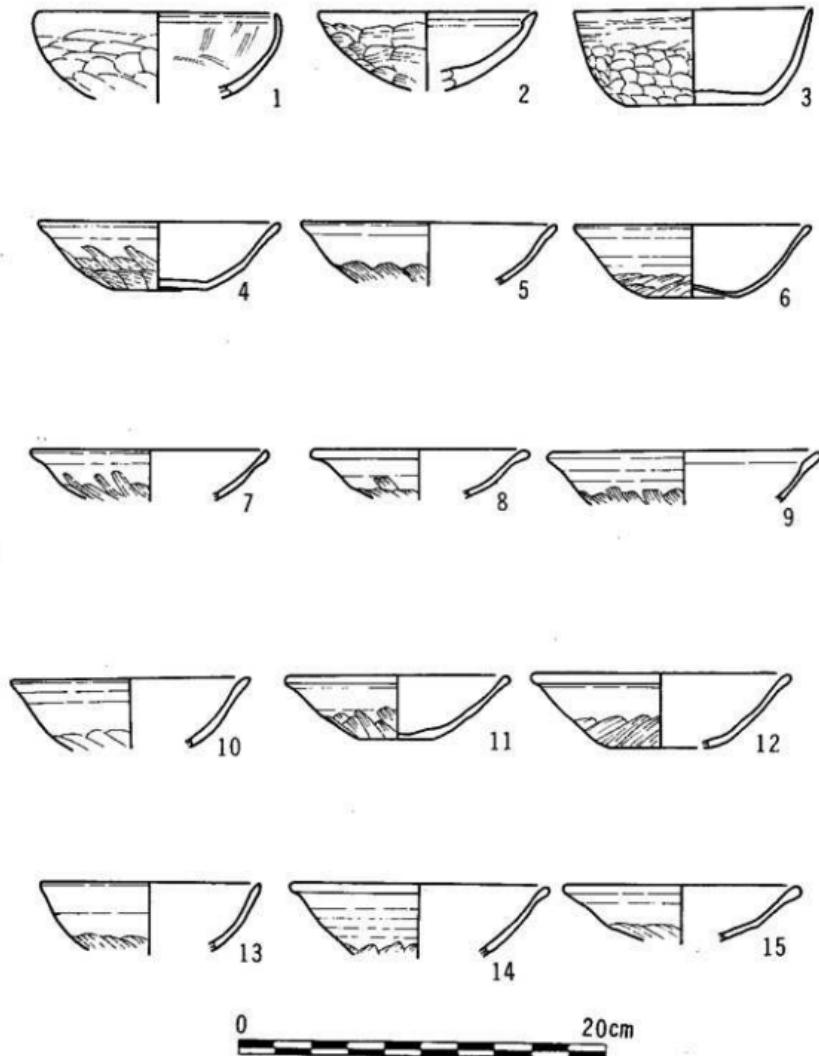
以上南地点の遺物を概観してきたが、暗文手法、高盤等が畿内と近い技法を示す反面、須恵器、灰釉陶器の量の少なさ、内外面黒色土器がほとんど見られない点など逆の現象を示す資料も多い。又畿内との関連を示す黒色暗文上器や高盤は若干時期的な差がある様である。

北地点で出土した遺物の見るべきものは、A4グリッドのものである。焼土を中心の一括出土した遺物は南地点の土師器集積遺構出土遺物とはほぼ同一時期か後続するものであろう。又、表採品としてあるが、いづれも工事中に掘り出されたもので、北地区出土品である92は古墳時代のコシキと思われるものである。

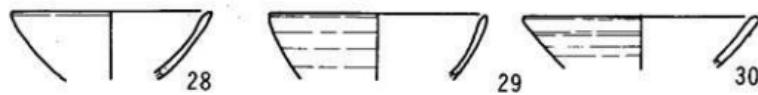
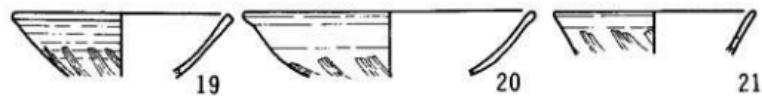
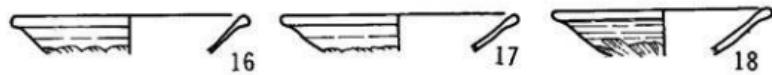
94, 95, 97, 98は布目瓦で、他に表採品として多くの破片があるが、埴物址の様な遺構を伴っていない。調査範囲が狭かった為かもしれないが、土師器等の生産地の可能性を考えた場合、むしろ瓦生産も近くで行なわれていたことを想定しても良いかと考える。96は土師質胎土の土器片で表は桃葉の様なレリーフがあり、裏面に刻書で「田」とある。新しい遺物かもしれないが参考の為図示した。

第31図～第34図は十郎橋工事中出土の一括遺物である。破片が多く復元実測が多いが、一括遺物としての傾向を知る為には良好な資料と言える。図示した84個の遺物のうち18個が黒色上器である。全体の約78%が普通の土器で残る22%が黒色上器ということになる。土器の杯及び皿は玉縁外反口縁をもち、胴から底部にかけてのヘラ削があらわい。又、ヘラ削の無いものも外反玉縁は変わらないので、この実測できなかった下部にヘラ削があったものも多いと考えられる。黒色土器のうち1点64のみが暗文が施されるだけで特異な存在である。黒色土器の器径は一般的の土器に比べ大きく、用途の上で分類があったことがうかがわれるであろう。

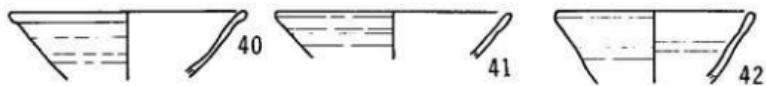
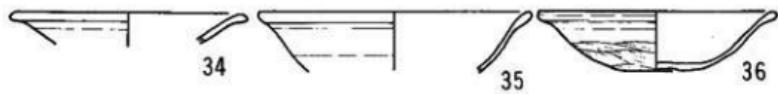
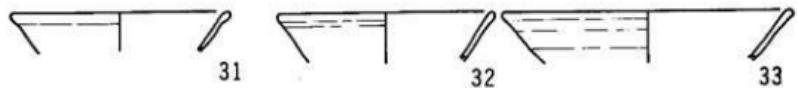
(木木)



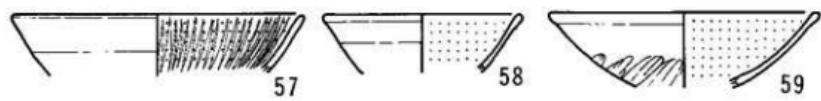
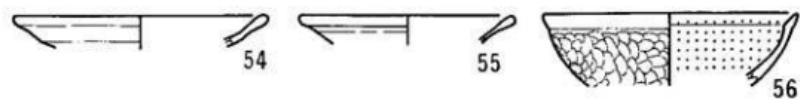
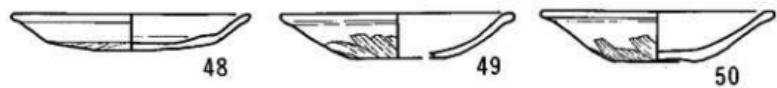
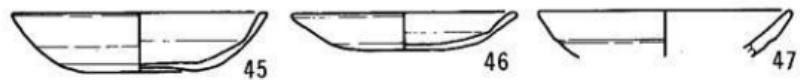
第24圖 南池點出土遺物



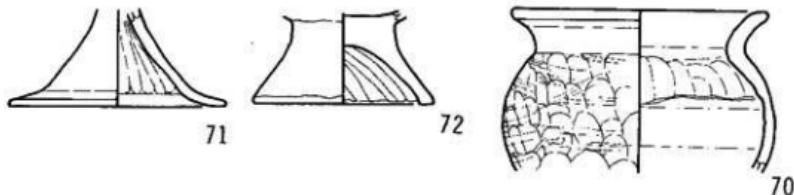
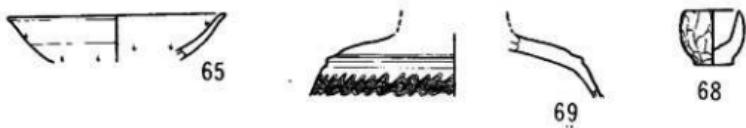
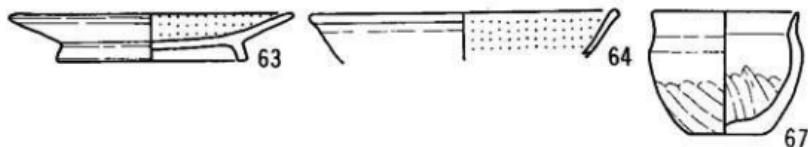
第25号 南地点出土遗物



第26図 南地点出土遺物

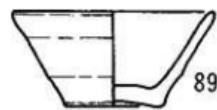
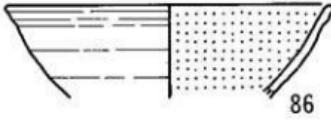
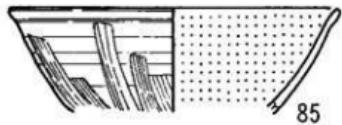
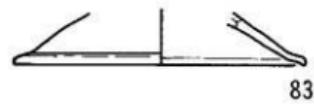
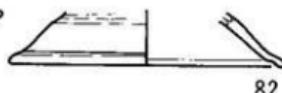
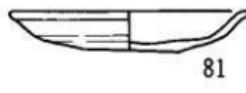
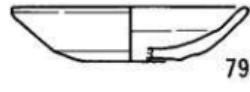
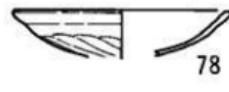
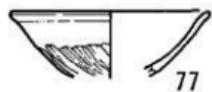
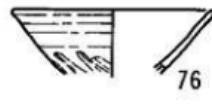
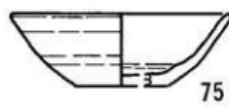


第27圖 南地点出土遺物

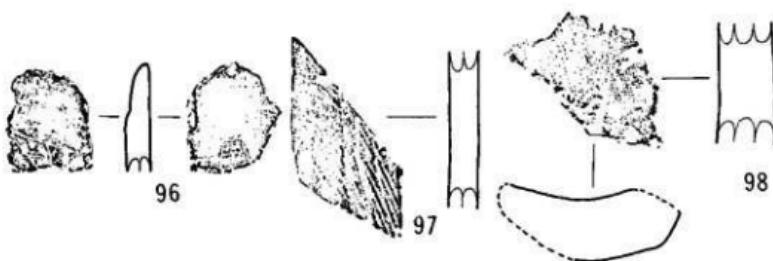
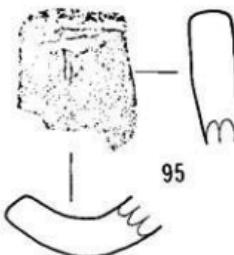
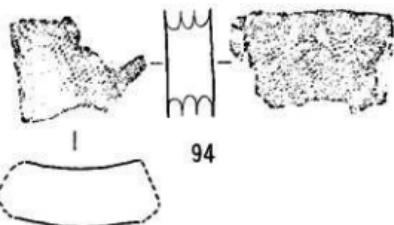
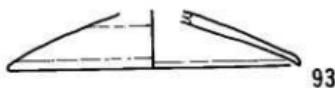


0 20cm

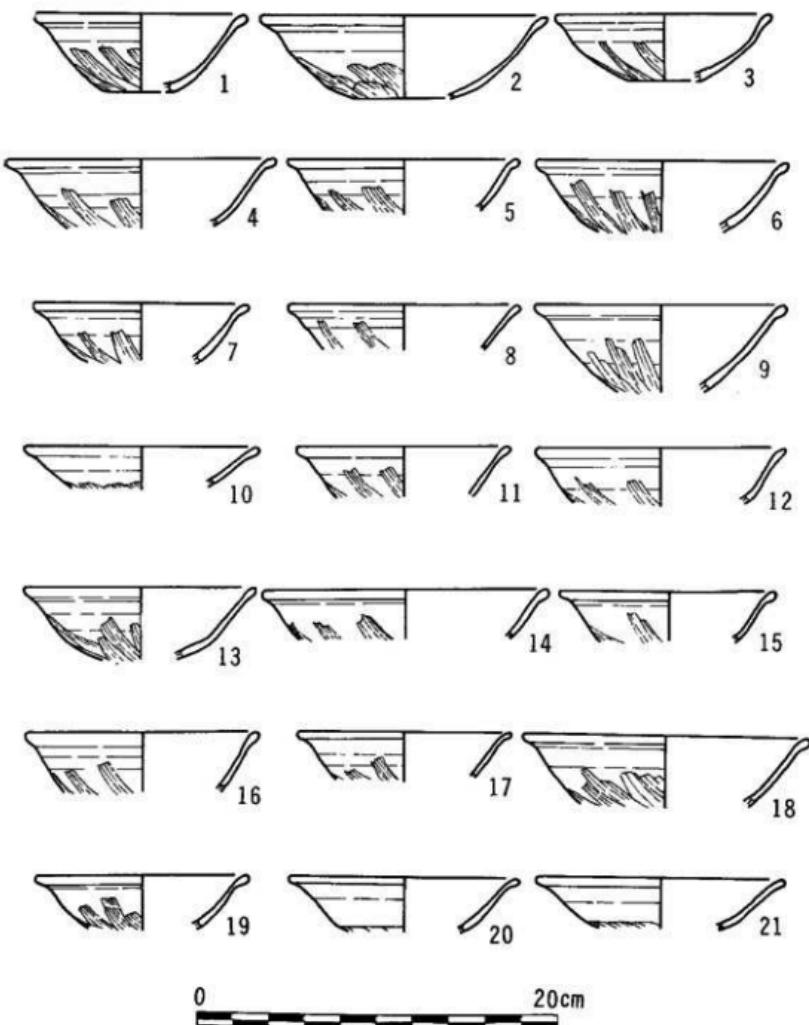
第28圖 南地點出土遺物



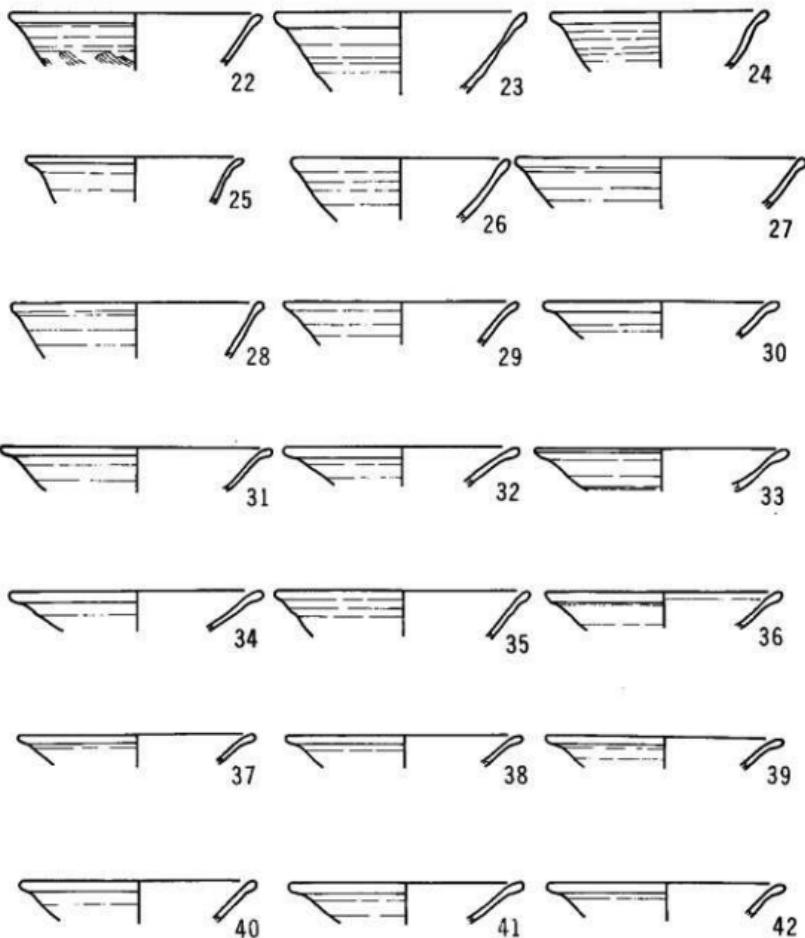
第29図 北地点出土遺物



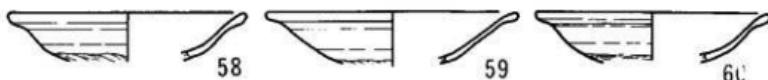
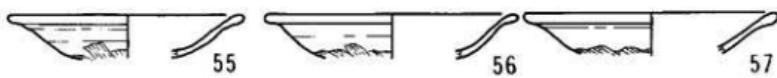
第30図 北地点出土遺物



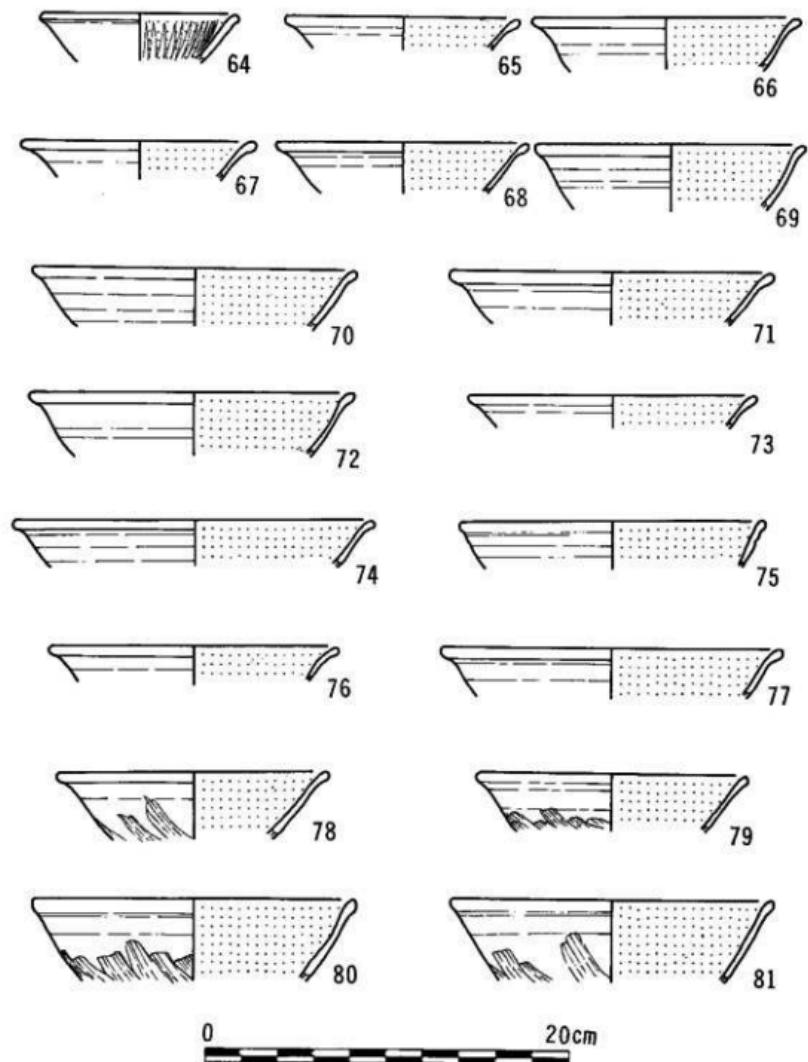
第31図 小郎橋地点出土遺物 (1)



第32图 小郎桥地点出土遗物 (2)



第33図 十郎橋地点出土遺物 (3)



第34図 十郎橋地点出土遺物 (4)

表 6

図面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量					緑	形
					口径	底径	高さ	口	銅		
第24図1	南 A 2	P 2	土師器		13			内反	横ナデ	②	ヘラみがき
2	夕 A 2			夕		12		外	傾		横ナデ
3	夕 A 7	P 1		夕 杯	13	5.2	5.5	夕			横ナデ
4	夕 A 4			夕 夕	14	3.7	5	外	反		夕
5	夕 A 4	P 7		夕 夕	13.8			夕			夕
8	夕 A 4	P9, 14-1		夕 夕	13	4	5	夕			夕
7	夕 A 5	P 5		夕 夕	12.8			外傾やや玉縁			夕
8	夕 A 4			夕 夕	12			外反	玉縁		夕
9	夕 A 4			夕 夕	14.8			外傾	玉縁		夕
10	夕 夕			夕 夕	13			外傾			夕
11	夕 A 4	P 12		夕 夕	12	3.5	4.2	夕 やや玉縁			夕
12	夕 夕	P14-2		夕 夕	14.4	4	5.2	外反やや玉縁			夕
13	夕 A 5			夕 夕	12			外傾	尖唇		夕
14	夕 B 9	畫		夕 夕	14			外反	玉縁		夕
15	夕 夕			夕 夕	13			夕			夕
第25図16	南 A 8		土師器	杯	12.6			外反	玉縁		夕
17	夕 A 8			夕 夕	13			夕			夕
18	夕 A 8			夕 夕	12			夕			夕
19	夕 A 8			夕 夕	11.8			外傾やや玉縁			夕
20	夕 A 4	P 13		夕 夕	16			夕			夕
21	夕 A 3			夕 夕	11			外	傾		夕
22	夕 A 8			夕 夕	15			外反	玉縁		夕
23	夕 A 8			夕 夕	12			外傾	角縁		夕
24	夕 A 8			夕 夕	13			外傾やや玉縁			夕
25	夕 A 3			夕 夕	12			外	傾		夕
26	夕 A 8			夕 夕	14			外反	玉縁		夕
27	夕 B 5			夕 夕	11			外傾	尖唇		夕
28	夕 B 5			夕 夕	11			夕			夕
29	夕 B 3			夕 夕	12			夕			夕
30	夕 A 8			夕 夕	13			外	傾		夕
第26図31	南 A 4		土師器	杯	12			外反	玉縁	横	ナデ
32	夕 A 4			夕 夕	12			外	傾		夕
33	夕 A 4			夕 夕	16			夕			夕
34	夕 A 4			夕 盆	13			外	反		夕

方	部	基	部	胎	土	焼	成	色	内	外	備	考
④	④	④	④	こまかい		やや生焼成	赤褐色	赤褐色				
ヘラケズリ				タ	良	好	黄褐色	黄褐色				
横ヘラナデ		糸切後ヘラ削		タ		タ	赤褐色	赤褐色		底部周囲ヘラ		
横ヘラ削		糸一ヘラ削		タ		タ	タ	タ				
タ				タ		タ	タ	タ	タ			
タ		タ		タ		やや生焼	黄褐色	黄褐色				
タ				タ	良	好	暗褐色	暗褐色				
タ				タ		タ	タ	タ	タ			
タ				やや荒い		タ	黄褐色	黄褐色				
タ				こまかい		タ	赤褐色	赤褐色				
タ		ヘラ削り		タ		やや生	赤色	赤色				
タ		タ		タ	良	好	赤褐色	赤褐色				
タ				タ		やや生	黄褐色	黄褐色				
タ				タ	良	好	赤褐色	赤褐色				
タ				タ		タ	タ	タ				
タ				タ		タ	黄褐色	黄褐色				
タ				タ		タ	タ	タ				
タ				タ		タ	タ	タ				
タ		やや荒い		不	良	赤褐色	赤褐色					
タ		タ		タ	良	好	タ	タ				
タ				こまかい	良	好	タ	タ				
タ				タ		タ	タ	タ				
タ				タ		タ	タ	タ				
タ				タ		タ	褐色	褐色				
タ				タ		タ	赤褐色	赤褐色				
横ナデ				タ		やや牛	褐色	褐色				
タ				タ		タ	赤褐色	赤褐色				
タ				タ		タ	黄褐色	黄褐色				
タ				タ	良	好	赤褐色	赤褐色				
横ナデ				タ		やや生	赤褐色	赤褐色				
タ				タ		タ	タ	タ				
タ				タ		タ	タ	タ				
タ				タ		タ	タ	タ				

表7

圓筒番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法量			整 形		
					口径	高さ	底径	口 縁	縁	脚
第26図35	南 A 4	P 1	土師器	杯	15			外 反	玉 縁	横ナデ
36	タ A 4	P 10	タ	皿	13.2	3.4	4.5	タ		横ナデ
37	タ A 4		タ	杯	16			タ		タ
38	タ A 4	P 8	タ	タ	12			タ		タ
39	タ A 4	P 4	タ	タ	14			外傾やや玉縁		タ
40	タ A 8	P 1—IV	タ	タ	13			外反やや玉縁		タ
41	タ A 8		タ	タ	13			外 傾		タ
42	タ A 5		タ	タ	11			タ		タ
43	タ A 8		タ	タ	16			外傾やや玉縁		タ
44	タ A 8		タ	タ	16			タ		タ
第27図45	南 A 2		土師器	皿	14.2	3.3	6	外	傾	横ナデ
46	タ A 2	P 1—I	タ	タ	12.5	2	4	タ		タ
47	タ A 5	P 1—II	タ	タ	14.2			タ		タ
48	タ A 4	P 6	タ	タ	13.2	2	3	タ		タ
49	タ A 8	P 2—I	タ	タ	13	2.5	5.2	外 反	玉 縁	タ
50	タ A 8	P 1—III	タ	タ	13	2.8	4.6	タ		タ
51	タ A 8		タ	タ	13			外 傾		タ
52	タ A 8		タ	タ	14			タ		タ
53	タ A 2	P 5—II	タ	タ	14.2			外 反	玉 縁	タ
54	タ A 4		タ	タ	14			タ		タ
55	タ A 4		タ	タ	12			タ		タ
56	タ B 5		タ	杯	14.2			外 傾		タ
57	タ A 2	P 5—I	タ	タ	16.2			外 反	ロクロ横ヘラ踏文	
58	タ A 4		タ	タ	11			外傾やや玉縁	横ナデ	
59	タ A 4	P 2	タ	タ	15			タ		タ
60	タ A 4		タ	タ	15			タ		タ
61	タ A 8		タ	皿	13			タ		タ
62	タ A 4	P 15	タ	タ	13			タ		タ
第28図43	南 B 5		土師器	皿	15.6	2.7	10.5	外	傾	横ナデ
64	タ A 4		タ	杯	17			タ		タ
65	タ B 9		綠釉陶器	杯	12			やや外反	和全面	
66	タ A 8		土師器	タ	17			外 反	横ナデ	
67	タ A 2	P 4	タ	小形甕	8	6.8	4	やや外反	横ナデ指ナデ	
68	タ A 2	P 3	タ	手ツクネ土器	3	3	2	直 立	指ナデ	

方 部	法 部	胎 土	焼 成	色 調 内 外	備 考
横ナデ		こまかい	やや生	赤褐色 赤褐色	
口横ヘラ削	ヘラ削	タ	タ	タ タ	
横ナデ		タ	タ	タ タ	
タ		タ	タ	タ タ	
タ		タ	タ	タ タ	
タ		タ	良 好	黄褐色 黄褐色	
タ	タ	タ	タ	タ タ	
タ		タ	タ	黄白色 黄白色	
タ		やや荒い	や や生	褐色 褐色	
貢、ヘラ削	ヘラ円削	こまかい	タ	赤褐色 赤褐色	脚下部底部内削
タ	タ	タ	タ タ	タ タ	
横ナデ		タ	良 好	赤色 赤色	
横、ヘラ削	ヘラ削	タ	タ	暗褐色 暗褐色	底部ヘラ切か
タ	タ	タ	タ	褐色 褐色	
タ	タ	タ	タ	黄褐色 黄褐色	
横ナデ		タ	タ	黄白色 黄白色	
タ		タ	タ	赤黄色 赤黄色	
横ヘラ横削		タ	タ	赤褐色 赤褐色	
タ		タ	や や生	タ タ	
横ナデ		タ	良 好	赤黄色 赤黄色	
ヘラみがき		タ	タ	黑色 暗褐色	山縁外面横ナデ
横ナデ		タ	タ	タ 褐色	
タ		タ	タ	タ 黄褐色	
横、ヘラ削		タ	タ	タ 赤褐色	
タ		タ	タ	タ タ	
タ		タ	タ	黑色 黑色	
横ナデ		タ	タ	黑色 褐色	
横ナデ	高合	こまかい	良 好	黑色 赤色	
タ		タ	タ	タ タ	
釉全面		黄褐色かたり	タ	深緑 深綠	
横ナデ		こまかい	良 好	赤色 赤色	
横ナデ、指ナデ	ヘラなで	石英粉を 多く含む	や や生	黄白色 黄白色	
指ナデ		タ	こまかい	や や生	暗褐色 暗褐色

表 8

國面番号	出土地点	出土状態	種類	器形	法 異			整 形		
					口	格	高	底	邊	口
第28図69	南 A 5		須恵器	壺						◎
70	南表採		土師器	壺	14				横ナデ	横、指正
71	夕 B 1		夕	高杯脚			12			指ナデ
72	夕 A 5	P 1-1	夕	台			10			夕
73	夕 B 5		夕	高杯脚						ヘラナデ
第29図74	北 A 4	P 2	土師器	杯	11	3.7	4	やや外反		横、ヘラ暗文
75	夕A4抜	P 15	夕	夕	12	4	5	外傾	横ナデ	
76	夕 A 4		夕	夕	11			夕		夕
77	夕 A 3		夕	夕	11			やや外反		夕
78	夕 A 6		夕	皿	12			外傾		夕
79	夕 A 4		夕	夕	13	3.5.4		夕		夕
80	夕A4抜	P 16	夕	夕	13.2	2.8	5.8	夕		夕
81	夕 A 4	P 4	夕	夕	13.2	2.1	5.3	やや外反		夕
82	夕 A 3		夕	杯蓋			15			夕
83	夕A4抜		夕	夕			16			夕
84	夕 A 4		夕	夕			17			夕
85	夕 表		夕	杯	18.1			やや外反		夕
86	夕 A 4		夕	夕	18.2			外傾		夕
87	夕 表		夕	夕	14	4.5	7	夕	夕暗文	
88	夕 表		夕	皿	13.7			やや外反	横ナデ	
89	夕 抹		夕	杯	11	5.1	5.3	外傾		夕
第30図90	北 表		土師器	杯	16			外傾	横、ヘラ暗文	
91	夕 夕		夕	夕	16			外反	横ナデ	
92	夕 夕		夕	コシキ	14.2	9	4	直	口ヘタ	
93	夕 夕		夕	杯蓋	16				横ナデ	
94	夕 夕		瓦	瓦(半)					布目	
95	夕 夕		夕	夕(丸)					布目	
96	夕 夕		土師質	不明						
97	夕 夕		瓦	瓦(半)					布目	
98	夕 夕		夕	夕(平)					布目	

方 法			胎 土	焼 成	色 調	内 外	備	考
部	底 部	部						
波状側目文	◎	◎	ややあらい	良 好	青灰色	青灰色		
ヘラナデ			タ		黄褐色	黄褐色		
横ナデ			こまかい	や や	牛	赤褐色	赤褐色	
なでつけ			石美粒で やや荒い	良 好	暗褐色	暗褐色	台底部木葉模上には横毛目	
ナデ、ヘラ削			こまかい	タ	赤色	赤色		
横、ヘラ削		糸切、ヘラ	こまかい	や や 生	赤黄色	赤黄色	放射状暗文	
横ナデ		ヘラ削	タ	タ	タ	タ		
横、ヘラ削			タ	良 好	赤色	赤色		
タ			タ	や や 生	黄白色	黄白色		
タ			タ		赤褐色	赤褐色		
横、ヘラ円削		ヘラ削	タ	良 好	タ	タ		
タ		糸切ヘラ円削	タ	や や 生	赤黄色	赤黄色		
タ		ヘラ削	タ	良 好	赤褐色	赤褐色		
タ			タ	タ	タ	タ	上部ヘラ横削	
横ナデ			やや荒い	や や 生	赤色	赤色		
タ			こまかい	良 好	赤褐色	赤褐色		
横、ヘラ削			タ		タ	黑色	黄褐色	
横ナデ			タ		タ	黑色	赤褐色	
タ			タ	タ	タ	タ	放射状暗文	
タ			タ		黄白色	黄白色		
タ		糸切	タ	や や 生	赤褐色	赤褐色		
横ナデ			こまかい	良 好	黑色	暗褐色		
タ			タ		タ	黑色	タ	
ヘラなで		ヘラ削	タ		赤褐色	赤褐色	口縁横ナデ	
横ナデ			タ	タ	タ	タ	外面上部タール付着	
板 目								
							刻者「田」	

5. 考 察

(1) 土師器集積遺構出土品の分類

出土遺物は土師器、須恵器、瓦、石器等見られるが、順次分類してみよう。

土師器には皿形土器、杯形土器、鉢形土器、片口形土器、變形土器等あるが、南部ブロックよりは杯形土器と皿形土器（1点）、小型變形土器（1点）が出土したのみで、他の器形（黒色土器を含め）はすべて北部ブロックより出土している。

皿形土器は大別すると次の様になる。

A類 脊部下部に横位の箝削りの見られるもの

B類 脊部下部に斜位（上から下へ）の箝削りの見られるもの

C類 黒色土器

ア、A1類（第10図4・5）

A類中、口縁部が内傾気味に開き、内面に強いくひれ部を有する。胎内は精々され、表面は滑らかな仕上りである。底は回転箝削である。

イ、A2類（第10図6～15、第11図1～18、第12図1～11）

A類中、口縁部が玉縁で外反するもので、器高によって細分すると、20n/m以下のA2a類（第10図6～12、14）、21m/m～29n/mのA2b類（第10図13、15、第11図1～18、第12図1～8）、30m/m以上のA2c類（第12図9～11）に分類され、底は回転箝削である。なお第12図6～11は山底を形成する。

ウ、A3類（第10図1～3）

A類中、内面に箝磨を有するもので、口縁部が玉縁外反のA3a類（第10図1・2）と、口唇部が角ばるA3b類（第10図3）に細分される。底は回転箝削である。

エ、A4類（第12図12）

口縁部が内傾気味に開き、口唇部は丸形を呈する。器肉厚く重量感がある。底部は回転箝削である。

オ、B1類（第13図1・2）

B類中、口縁部が内傾気味に開くものである。底は回転箝削である。

カ、B2類（第13図3～8）

B類中、口縁が玉縁外反するものである。底は回転箝削（第13図8）のものと、静止箝削（第13図4・6・7）の2種類がある。

キ、C類（第17図1～3）

b類黒色土器（第17図1）で、器形的にはB類を踏襲するものであるが、内面に花弁状箝磨を有する。底は静止箝削である。

第17図2・3は外面に一部黒色が見られるので、一応黒色として取り扱ったが、A2類に属するものであろう。

杯形土器は大別すると次の様になる。

A類 脊部下部に斜位（上から下）の箝削が見られる。

B類 合付杯

C類 黒色土器

ア、A1類（第14図1～15、第15図1～3）

A類中、口縁部が尖形ないし丸形を呈し、かつ内傾気味の口縁部であり、更に内面に範磨が施されるものである。整形は入念であり、器形の大きさも齊一性をとる。範磨の形態で放射状範磨のA1a類（第14図1～4）と花卉状範磨のA1b類（第10図5～15、第15図1～3）に細分される。底は回転範削と静止範削が見られ、回転範削の場合は必ず糸切痕を傷かに残す。

イ、A2類（第15図1～4）

A1類の内面に範磨の見られないものである。底は静止範削と回転範削（糸切痕を残す）の2通りがある。

ウ、A3類（第15図4～9）

A類中、口縁部が玉縁で外反し、内面に範磨を有するものである。整形は入念で、器形に齊一性が見られる。範磨の形態で放射状範磨のA3a類（第15図9）の花卉状範磨のA3b類（第15図4～8）とに細分できる。底は静止範削（第15図5・7）が判明する他は不明である。

エ、A4類（第16図5～10）

A3類の内面に範磨が見れないものである。底は底であるが、静に、回転どちらによるものか判明しない。

オ、B類（第15図1）

削り出し高台のものであるが、個数は図示した一例と、破片が1点見られるにすぎない。

カ、B類（第15図12）

高台が削り出しによるものではなく、水びき手法によって作られたもので、例は黒色土器を含め13例のみである。

キ、黒色土器

杯形黒色土器は大別すると、次の様になる。

C₁類 脚部下部に斜位（上から下）の範削を有する。

C₂類 脚部下部に横位の範削を有する。

C₃ 底が高台を有する。

（ア） C₁a類（第18図1・2）

a類黒色土器であり、口縁部が玉縁外反し、内面に花卉状範磨を有する。第18図2の範磨は、脚部内側に四方向（十字）に施され、かつ底内面にら線状範磨も施されている。底は静止範削（第18図2）が確認され、残りは範削であるが、静止か回転かいずれとも判断できない。

（イ） C₁b類（第19図2）

C₁a類の内面に花卉状範磨の外にら線状範磨を合せて施すものである。

（ウ） C₁c類（第17図7・8）

a類黒色土器で、器形的にはC₁a類に該当するものであるが、内面に全く範磨を施していない。底は底であるが、回転静止かいずれによるものか不明である。

（エ） C₂a類（第18図3～10）

a類黒色土器で、内面に放射状あるいは花卉状の範磨が施されている。第18図5～8は器形に齊

一性が見られる。この種の口縁部内側に横位の箝磨が見られるものが多い。底はすべて回転箠削によってなされている。

(オ) C₂b類 (第19図1・3・4)

a類黒色土器で、内面に花弁状箠磨が四方(十字)に、その間にら線状箠磨を交互に施したものである。底部を全く欠き、整形方法からは、次のC₃類に含まれるものかもしれない。

(カ) C₂c類 (第17図9・10)

a類黒色土器で、内面に全く箠削を施していない。底は第8図9が回転箠削で、外は不明である。

(キ) C₃a類 (第20図1~6)

a類黒色土器で、内面に花弁状箠磨が四方(十字)に、その間にら線状箠磨が施されるのを通常とする。第20図2・6の場合には底内面にも「十」字状に箠磨が施されている。底は削り出し高台である。

(ク) C₃b類 (第20図7・8)

a類黒色土器で、高台が水びき手法によって作られている。第20図7の底内面には放射状箠磨が施されている。

なお第17図4~6は外面一部に黒色部分が認められるものである。

鉢形土器 (第16図11・12・第19図5)

口縁が20mmを越すもので、3点確認されている。3点とも水びき手法による整形で、胴部下部に横位の箠削、底は回転箠削という共通点をもつが、2分類される。

A類 口縁口象部が大きく外反する (第16図11・12)

B類 口縁部は僅かに外反し、口唇部が角形を呈するa類黒色土器である。

片口上器 (第19図6)

a類黒色土器であり、胴部下部に構位箠削、底は回転箠削にて整形されている。図示したのは1点であるが、この外に片口部が1点同地点より出土している。

杯蓋形土器 (第21図1)

1点以上が確認されたにすぎない。外部に一部黒色部が認められる。口縁部は簡略化された鳥嘴状を呈する。

甕形土器 (第21図3)

口縁部が比較的薄い作りで、外反する。胴部内外に櫛状箠磨が頭者に認められる。

小型甕形土器 (第21図2)

短かい口縁部が外反するもので、胴部内外に櫛状箠磨が認められる。木の葉底。

砾石 (第21図7)

粘板岩製のもので、使用面が2面見られる。

須恵器 (第21図4・5・6)

須恵器の出土量は極めて少なく、長頸壺 (第21図4)、壺形土器 (同6)、甕形土器 (同5) の器形が見られる。

布目瓦 (第22図1~4、第23図1・2)

丸瓦 (第23図1) 平瓦 (第23図2、第22図1~4) の2種類がある。第22図の4例が土師器集積遺構内より、第23図2例は表採品である。

(2) 法量と形態

木造構付近は、木木體が述べている様に、甲斐面に於ける一人営業地城を形成していたものと考えられている場所であるが、現在に至るまで、その内容について考察できる資料は十分とは言えないのであり、法量等について検討を加えるのも、あながち無駄ではあるまい。

出土土器の杯、皿、黑色土器について第1～2表を中心に考察する。

A₁類杯形土器

口径 最小102m/m、最大115m/m、偏差13m/m。平均値は110m/mであり、この前後5m/m(106～115m/m)以内に93%が集中する。

底径 最小44m/m、最大57m/m、偏差13m/m。平均値は49.9m/mであり、この前後2m/m(48～52m/m)以内に80%が集中する。

器高 最小39m/m、最大46.5m/m、偏差7.5m/m。平均値は42.4m/mであり、この前後2.5m/m(40～45m/m)以内に80%が集中する。

A₂b類皿形土器

口径 最大126m/m、最大146m/m、偏差22m/m、平均値は131.6m/mであり、この前後6m/m(125.6m/m～137.6m/m)以内に80%が集中する。

底径 最小38m/m、最大74m/m、偏差36m/m、平均値は49m/mであり、この前後7m/m(42m/m～56m/m)以内に74%が集中する。

器高 最大23m/m、最大29m/m、偏差6m/m。平均値は25.6m/mであり、この前後3m/m(22.6m/m～28.6m/m)以内に96%が集中する。

A₁類杯形土器は口径にあっては、106m/m～115m/m以内に93%器高にあっては40m/m～45m/m以内に80%と極めて高い割合で集中化が認められ、この範囲に属さないものは僅か3例にすぎないのである。これは器形における法量の規格が存在したであろうことを推定する数的資料となり、且の標準化がなされたことを物語るものであろう。

A₂類 A₃類杯形土器における口径・器高の散布状況はA₁類杯形土器の散布範囲内に属するものであることから、やはり標準品の存在が考えられる。

次に底径の散布変はみると、A₁類、A₂類杯形土器とA₃類杯形土器は46m付近を境として散布部分が明瞭に分かれ、A₁類、A₂類杯形土器は底部が口徑に近く（底面積が大きく、台形に近い）なるのに対して、A₃類杯形土器は逆に底径は縮小するものである。三者の比を見れば、

器高 : 底径 : 口径

A ₁ 類杯形土器	1	1.17	2.5
A ₂ 類	1	1.19	2.9
A ₃ 類	1	1.0	3

となる。この違いは器形の形態による法量的規格が存在していることを推定させよう。即ちA₁類、A₂類杯形土器の口部部形態は尖形であるのに、A₃類杯形土器が口部で外反を呈する違いが底部縮小につながせるのであろう。

なお、底径からの規格は表の如く、推定するのは困難である。

A₂b類皿形土器は口径にあっては、125.6m/m～137.6m/mの間に80%、器高は22.6m/m～28.6

表 9
法量(1)

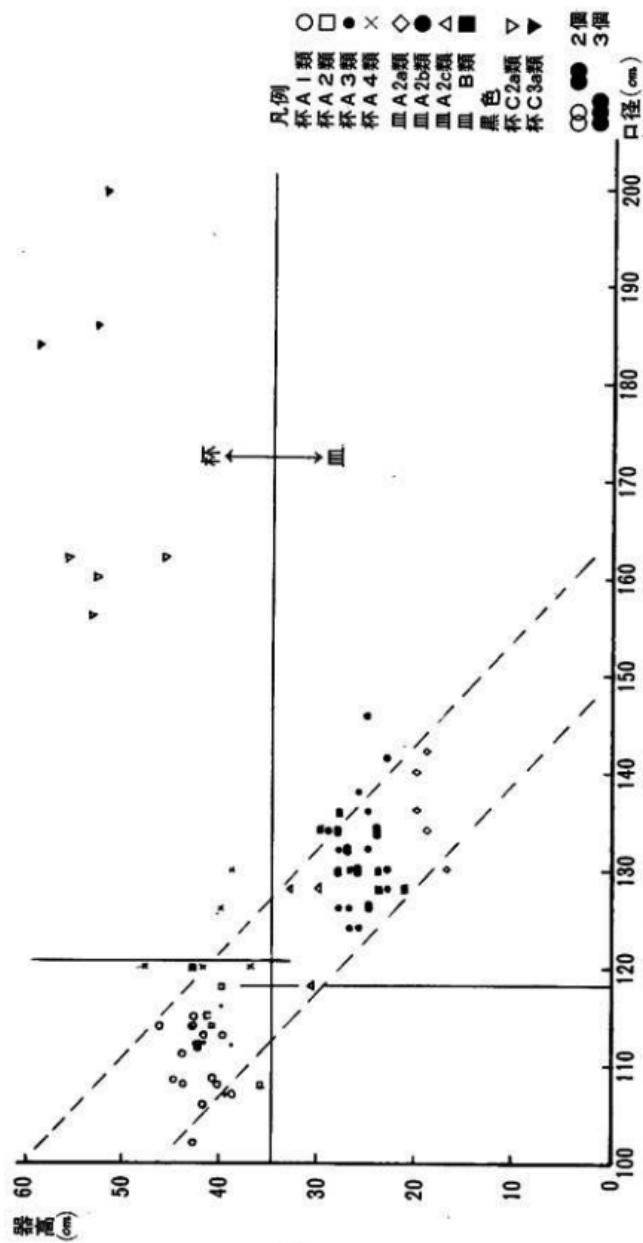
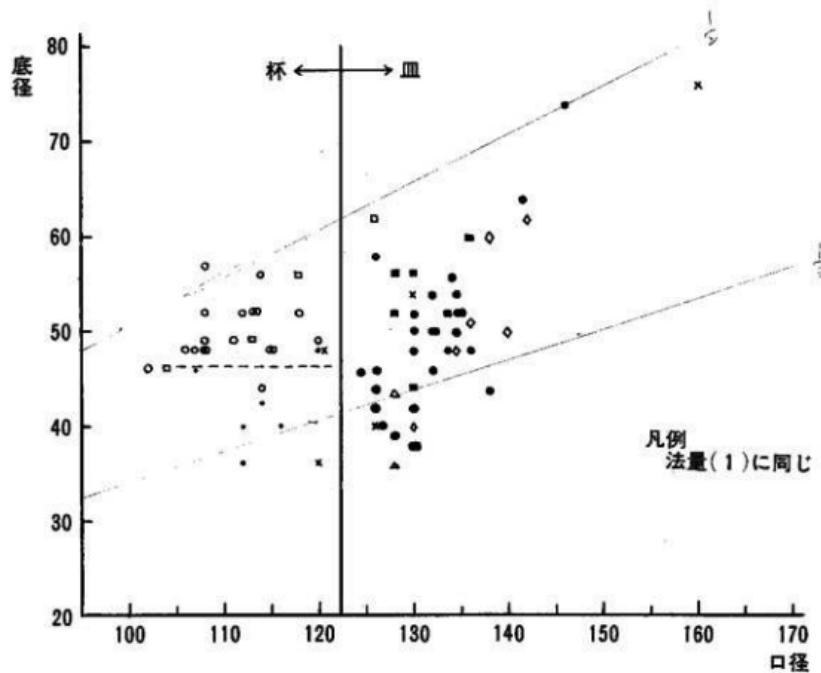


表 10

法量 (2)



m/mの高に96%と極めて高い集中を見せ、杯形土器同様に器形の規格化が推定できるのである。

A₂a類、A₂c類皿形土器は法量的には散布具合よりして、A₂b類杯形土器の両端に位置するものであり、現在の資料からは製作当初より、A₂a類、A₂c類皿形土器の規格があったものとは考えられずむしろA₂b類皿形土器製作過程に於いて偶然に生じたものと考えた方がよさそうである。

参考に3者の比を記すと、次の様になる。

器高 : 底径 : 口徑

A ₂ a類皿形土器	1	2.5	6
A ₂ b類	1	2	5
A ₂ c類	1	1.3	4

B類皿形土器は法量的にはA₂b類皿形土器の散布圏内に分布する。

なお、杯形土器同様、底径から規格は、表の如くで推定困難である。

黒色土器の法量的位置は第9表の如くで、概して人形品にのみ製作されることが明確に看取される。

杯、皿形土器について法量を見てきたが、次の様に整理される。

- 標準化は口徑と器高に対して第1次的に規制を加えて行なわれる。底径に対しては、それ程明確な規制は存在しないと考えられる。
- 時期については晩期II—2式～3式と特定できないが、杯・皿形土器は $\frac{1}{10}$ 勾配線（器高対口徑）を中心とする一定の比率で製作される（各時期に於いて検討してないので、外の時期に存在するか、その勾配角度の状況は現在は不明である）。

(3) 整形方法等について

本遺跡出土製品は甕形土器を除き、小型の杯形土器より大型の鉢形土器に至るまで、全て輪轉の回転力（本遺跡の場合右回転）による「水挽き成形」技法によって製品化されたものである。しかし、全て「水挽き成形」技法を基本に置くものであるが、その製作過程は器種により多少の違いが見られる。

皿形土器は

- A類 「水挽き成形」→内外面の調整（内面範磨を含む）→切離し（糸切り）→底の回転範削り・脇部下部横位回転範削り
- B類 「水挽き成形」→内外面の調整（内面範磨を含む）←切離し（糸切り）→底の静止範削り・脇部斜位範削り

の2通りの製作手順が見られる。A類は脇部下部を横位回転範削した場合には、底も必ず回転範削がなされる甕形上の規制が見られる。この場合、糸切り痕は全く削り取るのを通常とするが、糸切り痕を残存するものが、1例であるが認められる。

一方、B類についてもA類同様甕形上の規制が存在する。脇部に斜位（上部脇部から底部方向）範削を施した場合、底は必ず静止範削りによる整形方法が取られるのである。静止範削りの場合にも、完全に糸切り痕を削り取ってしまう例と、底の周間1cm～1.5cmを範削りし、糸切り痕を残存させている例とがあり、B類にあっては、その比率は $\frac{1}{2}$ となっている。

杯形土器は

A類 「水挽き成形」→内外面の調整（内面籠磨きを含む）→切離し（糸切り）→底の 静止籠削り・胴部斜位籠削り

B類

ア 「水挽き成形」→内外面の調整（内面籠磨きを含む）→切離し（糸切り）→底部回転籠削り→高台削り出し

イ 「水挽き成形」→内外面の調整（内面籠磨きを含む）→底部回転籠削り→高台「水挽き成形」の3通りの製作手順が見られる。A類においては 直形土器A類、B類同様、整形上の規制が存在する。胴部に斜位籠削りを施した場合、底は必ず静止籠削りが施されるのである。これは直形土器B類に認められる規制と全く同じであり、杯形土器には黒色土器に於ける环形上器を除いては、直形土器A類の様な胴部下部に横位回転籠削りを施す例は存在しない。静止籠削りを施した場合にも、完全に糸切り痕を削り取ってしまうものと、底の周囲の1cm~1.5cmを籠削りして糸切り痕を残す例が存在しているものとがあり、その比率は直形土器B類同様 $\frac{1}{2}$ である。

杯形土器にはB類として区分した底が高台を形成するものがあるが、これも最終段階において2通りの作り方が見られる。それは底部を横位回転籠削りした後、同部に籠削りを加え高台を形成する所謂「削り出し高台」のものと、底部、底を回転籠削りした後、同部に粘土板等を貼り付け、「水挽き成形」によって「高台」を引き出して形成するものである。しかし高台を形成するものは量的には微々たるものである。

黒色土器（皿・杯・鉢・片口形土器）に於ける輪形順序は 直形上器にあっては、前述直形土器B類、杯形土器にあっては、前述杯形土器A類、B類ア・イの外に

「水挽き成形」→内外面の調整（内面籠磨きを含む）→切離し（糸切り）→底の 回転籠削り・胴部下部横位回転籠削りのものも認められ、鉢・片口形土器にあって 今述べた様な底の回転籠削り・胴部下部横位回転籠削りを施すものであり、この後、最終段階として黒色発現のための「いぶし」が行なわれる所以である。

本遺跡に於いては、以上述べた様に輪體「水挽き成形」により 製造が作り出されるのであるが、切離しに於いて全て「糸切り」による方法であって、「籠切り」「籠削し」は全然存在しないという大きな特徴が見られるのである。

胎土について略記すると 粘土に石英粒、赤色スコリア粒、細石粒、金雲母等が1gあたり7~8粒（表面に肉眼観察による）が混入されているにすぎず構造上であり、胎土は引き締っている。焼成は人皆良好であり、胎土断面に層を形成（2~3層）して熱が胎土にかかったことを大半のものから観察できる。

（4） 編年上に占める位置

本遺跡の遺物出土状況は 前述の如くであり、南部と北部のブロック状に集積された2群を中心として、その周囲から出土したものである。南部ブロックからはA₁、A₂類杯形土器、A₄類直形土器、小壺形土器の出土を見ただけであった。特にA₁類、A₂類、杯形土器が、南部ブロック、出土品の95%を占める状況（註1）である。A₁類、A₂類杯形土器は 筆者編年試験の晩期II-2式~3式に置かれるものであるが、A₁類、A₂類とも口縁部が内側気味に開くことから、それ程新しく時期の

下降を必要としないと考えられる。A₄類皿形土器は晩期II-2式に特徴的に存在するものであり、杯、皿からすれば南部ブロック出土品は晩期II-2式に置かれるものであるが、同ブロック直上より小型壺形土器が出土した点に留意する必要がある。即ち、該小型壺形土器は晩期II-3式あたりに伴出する器形に類似することであり、杯・皿類と小型壺形土器の出土層位は明確に別れない等、合せ考察する必要があろう。

一方、北部ブロックからは、南部ブロックに比べ多種類の器形が出土している。このうち皿形土器が出土量の略半数以上を占める。北部ブロックで量的に多いのはA₂類、皿形七器、A₃類、A₄類、杯形土器、黒色土器等である。A₂類皿形土器は晩期II-3式のメルクマールに比定されているものである。A₃類杯形土器は南部ブロックのA₁類、A₂類杯形土器に比べ、口縁部が正規化しており、胴部下部に見られる斜位の窓割りは古いもの程入念に規則正しく行なわれるのに、粗雑な仕上げである点、A₁類杯形土器よりも後当のものといえよう。又、A₃類杯形土器の内面に見られる窓割は、遅くとも晩期II-4式までに消滅するので、A₃類杯形土器は晩期II-3式～4式に置かれる。又、A₄類杯形土器の初現は現在のところ晩期II-3式と見えている。壺形七器は晩期II-3式に見られる器形であり、これらからすると、北部ブロックの出土品は晩期II-3式に設定するのが妥当であろう。これはA₂類土器に伴って出土する器形である。

B類皿形土器の伴出比率が晩期II-3式の伴出比率に合致する点からも納得できるのである。

北部ブロック出土品は晩期II-3式に比定され、南部ブロックの出土品は小京壺形土器の綱年形態がまた見えきれていない現状から、一応晩期II-2式～3式に比定しておきたい。

今回の調査により晩期II-3式に於ける様式的把握が、これまでより明確になった。特に黒色土器に於ける様相は、その最たるものと言えよう。

なお、土師器集積遺構出土遺物は福井上晩期II-2式～3式であるが、これは南関東編付の四分式土器に該当するものである。

(5) 大坪遺跡の性格

南北点からは、2カ所の遺構が確認されたが、溝状遺構について、その性格が何であるかは丁寧りとなる資料を欠くのである。一方、土師器集積遺構については、夥しい土師器が出土していることから、廃棄場所かあるいは保管場所のいざれかの性質を持った遺構と考えられよう。出土土師器のうちの皿形土器、杯形土器等の法量について検討を加えて見ると、そこには器形上の法量的規格の存在を推定させるだけの特定範囲内に極めて高率の集中化が認められる(標準品)のである。更に出土状況を見ると、南部ブロックと北部ブロックとの間に僅かであるが相違が見られる。北部ブロックの上師器類は乱雜な堆積であり、無秩序に飛げ込まれたと表現するのが最も適している様な状態であったし、出土土師器を観察すると、器底の剥落したものや、亀裂の入ったものが南部ブロックより多く認められたのも事実である。南部ブロックからも今述べた様に杯形土器の器壁に剥落したものや、亀裂の入ったものが若干であるが見られる。これらから推定して該土師器集積遺構を不良品の施業場所と見て見てもよさそうであるが、南部ブロックの出土状況には更に、杯形土器が何個か積重ねられたものが何列かに並べられて置かれた様な節も同時に観察されているので、南北ブロックを同時に廃棄場所と見なすことには、若干疑問が持たれるが、北部ブロックに限れば廃棄場所と見なしてもさしつかえないと考える。

土師器集積遺構出土の土師器類が廃棄品か否さるかは別として、標準化された土師器の夥しい出土と、出土した土師器類に当然この時期の住居址であれば伴用が見られる墨書きを施した例を全く欠く事実からすれば、今回の出土品は今だ太端の消費者の手に渡ってはいない品と考えてもよろしかろう。

結論的に言えば、該遺構は既に生産されたもののうち販売ルートにのせられない不良品を廃棄した場所と言えよう。更に南北ブロックの周辺から全く焼土を発見できなかつたので、該遺構が窯の本体でないことも明らかとなつた。南北ブロックの出土品も廃棄品か、商品として保管された完品のいずれかであろうと推定される。

南地点は土師器集積遺構の出土品の外に、各グリッドよりも遺物が検出されており、特に第24図1～3、第27図56などは木柱が指摘している様に南関東編年式土器に比定されるものであろうが、特に第24図3の杯形上器は真間式土器と圓分式土器の接觸点あたりに位置づけられるものであり、県内の該時期における編年上の資料として興味あるものといえよう（註2）。

北地点においては、特に十郎橋近くよりブロック状で出土したものは、晩期II-4式～5式に比定できる一括資料として重要なである。

大坪遺跡付近一帯は、今回の南・北両地点の調査によって、

1. 稽古の出土
2. 器形の形態が酷似する
3. 墨書きの遺存例が見られない
4. 真間式～圓分式に渡る遺物である

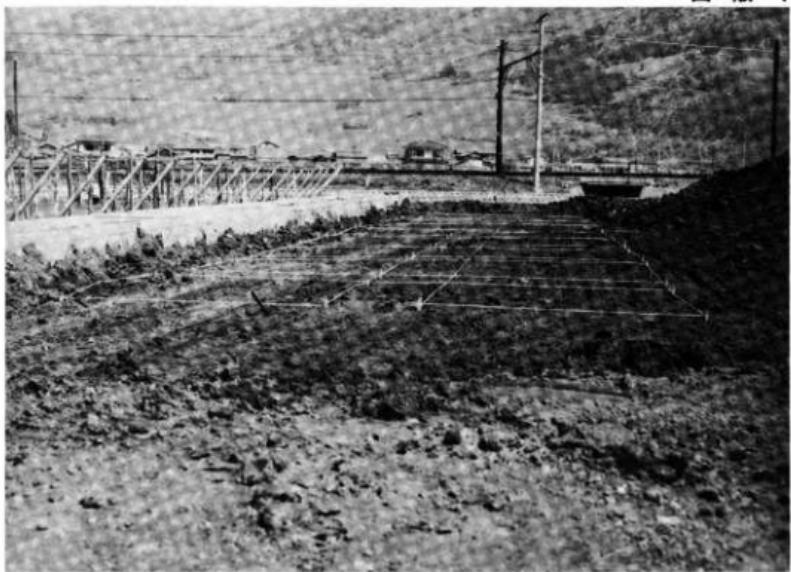
の諸点が明らかになり、一大窯業地であったことを今まで以上に妥当性を高めた訳であり、かつ長時間に渡って営まれていたことも推定できるのである。また県内に出土する土師器等の最大の供給地であることも合せ考察できるところとなつた。（註3）

（菊島）

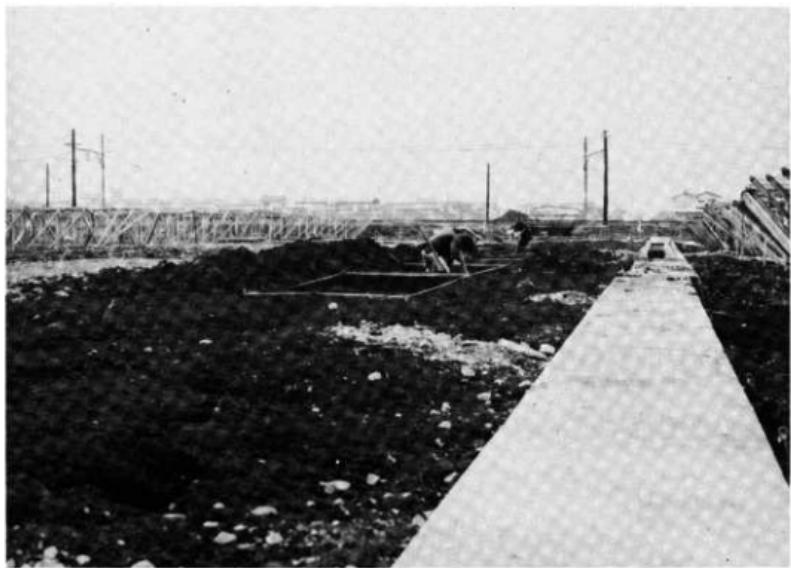
（註1） 摂稿 「山梨県に於ける晩期土師式土器の編年試論」『甲斐考古』12の2

2 第25図3の杯形土器の開部に見られる鉛削は通常見られるところの斜削のものではなく、横位に細かく削る手法のものであり、県内の晩期II以前に見られる手法である。

3 南関東編年式土器以前に該当すると考えられる遺物（第28図69・70・71）も出土しているので、更に古い時期に土師器の生産が開始されていたことも考えられる。



1、南地点全景（南より）



2. 北地点発掘風景



3. 南A2グリッド土器器集積遺構



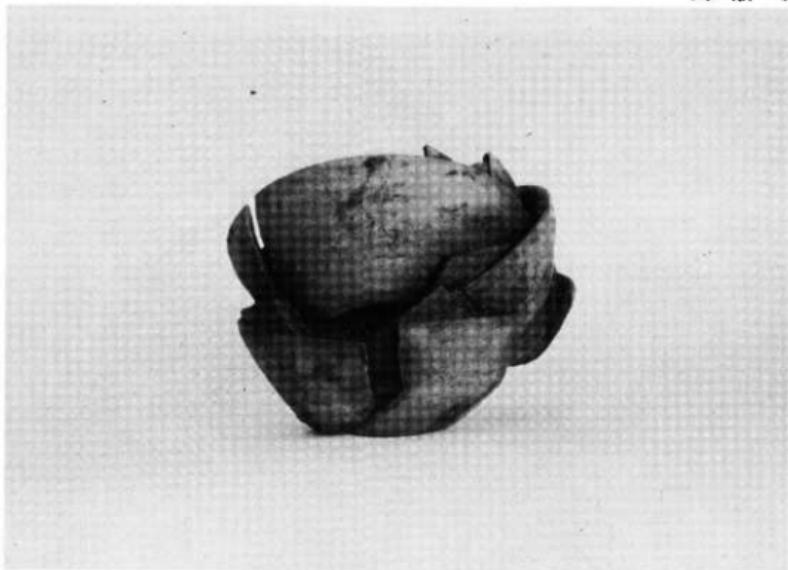
4. 同 上(南ブロック)



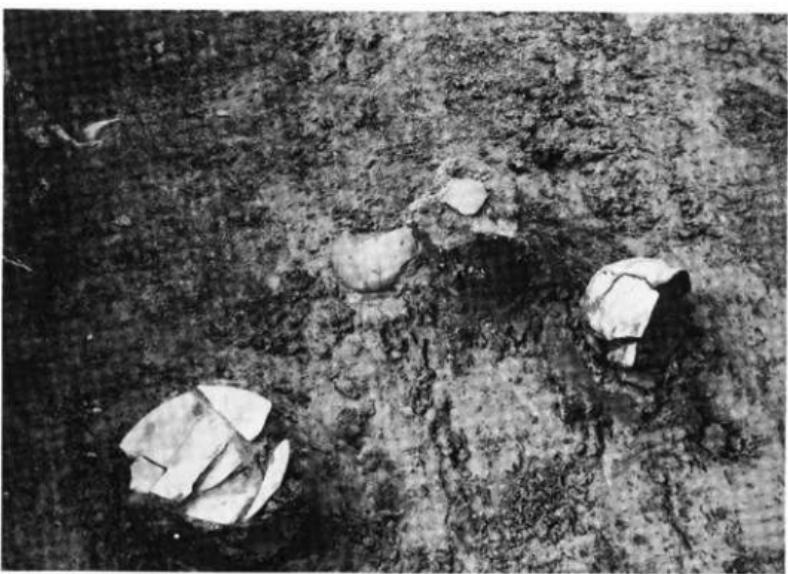
5. 同 前 (北グロック)



6. 南A4 グリッド



7. 土師集積出土遺物



8. 南A2グリッド



9. 南A 5 グリッド



10. 北A 4 グリッド

図版 6



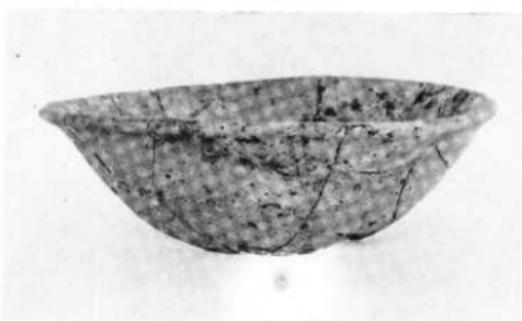
南A 2 P 4



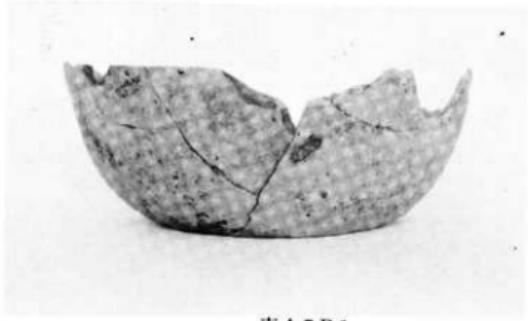
南A 4 P 9



南A 4 P 10



南A 4 P 14



南A 7 P 1



南A 5 P 1



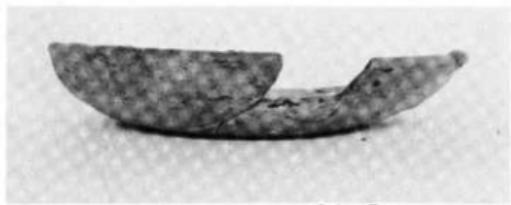
南B 1



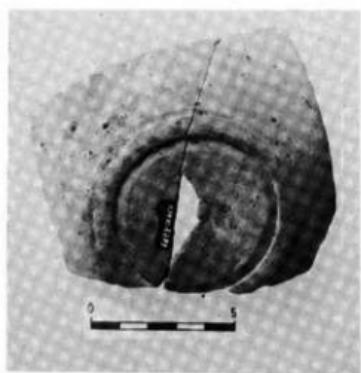
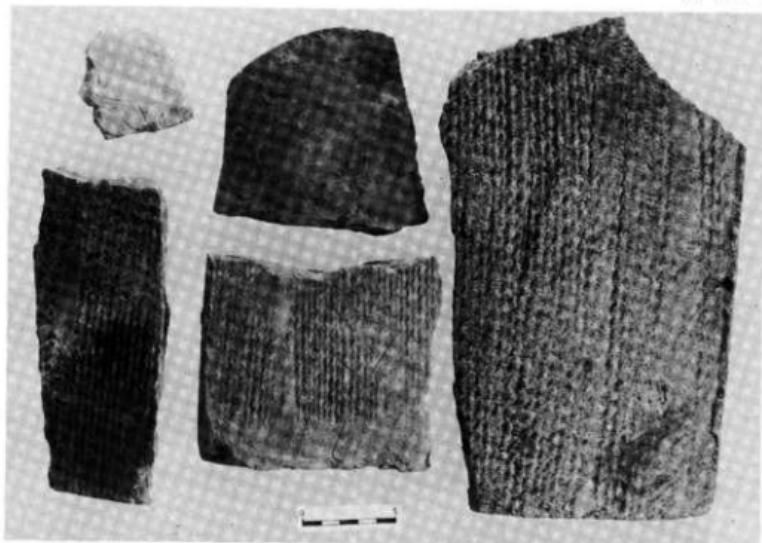
南B 5



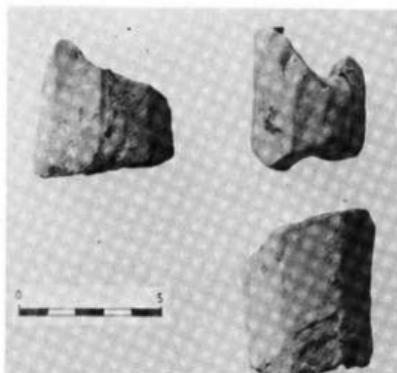
北A 4 P 2



北A 4 P 16

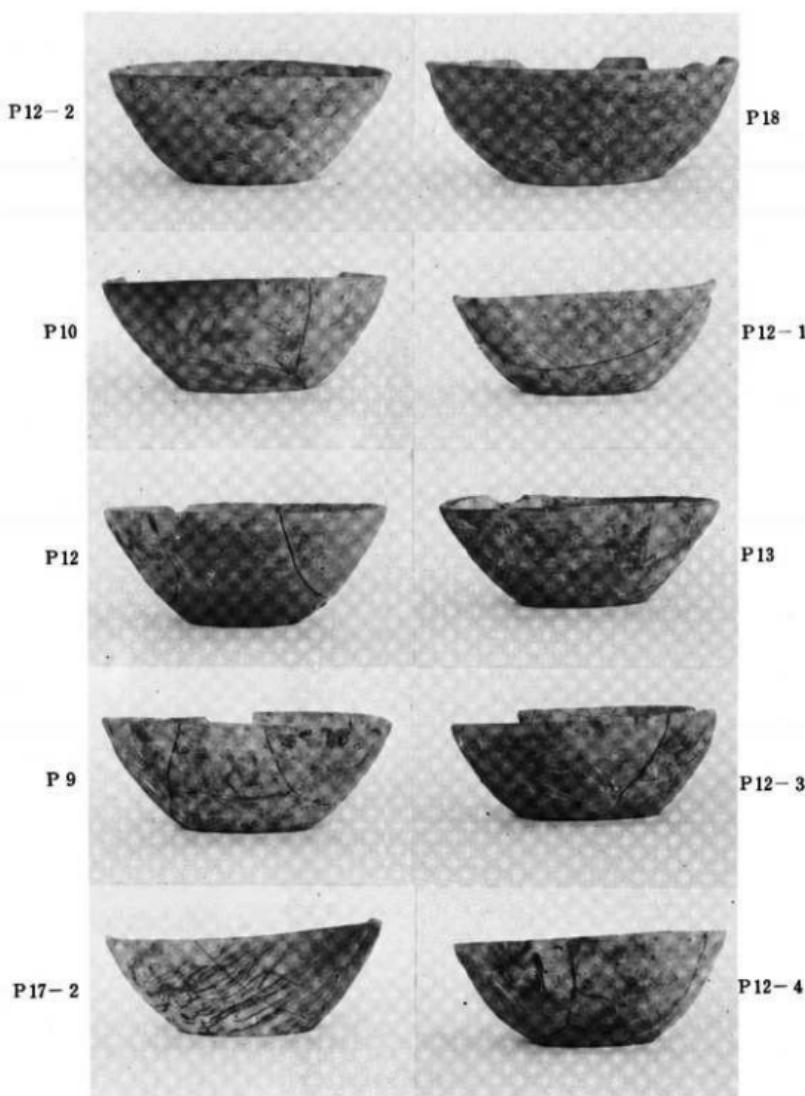


南A4P3 削出高台

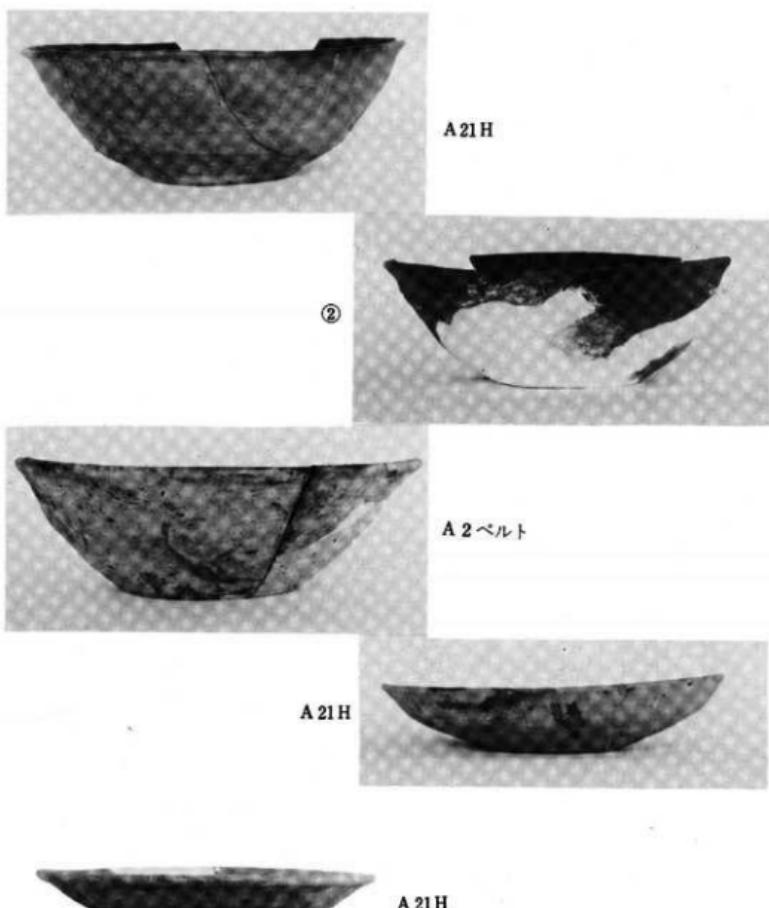


北表

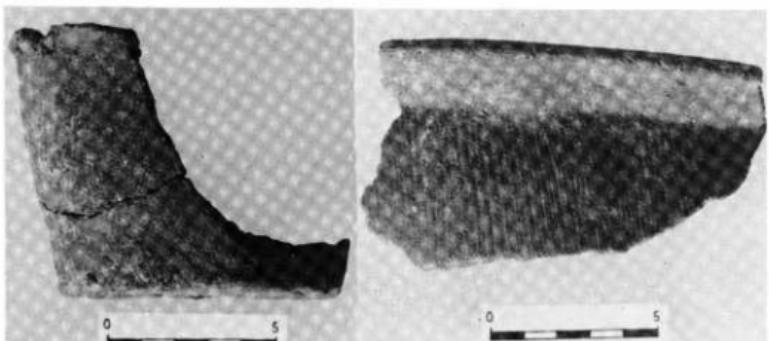
南A5P2 表



A 2 土師集積造構出土遺物(1)

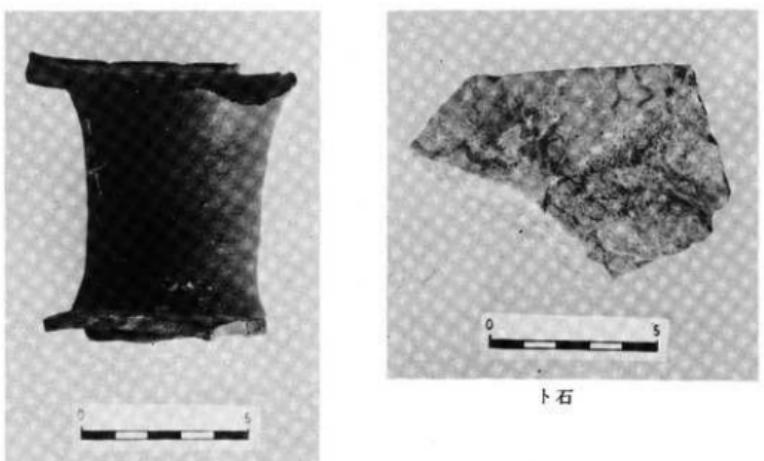


A 2 土師集積遺構出土遺物(2)

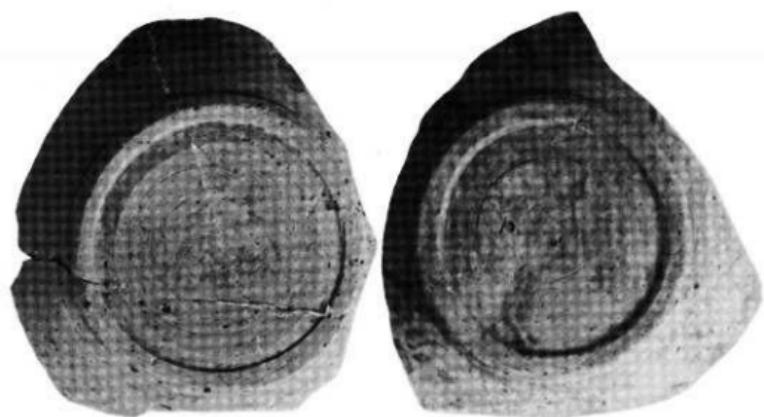


P 10

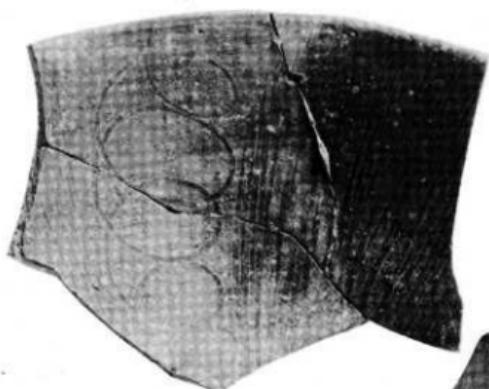
P 7



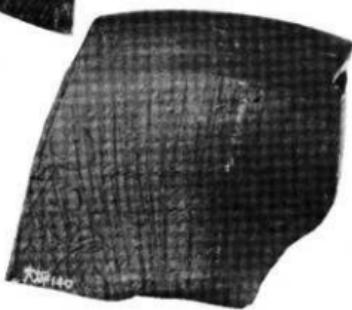
ト石



ヘラ削出高台



黒色土器内面暗文



A 2 土師器集積遺跡出土遺物

昭和51年3月25日印刷
昭和51年3月31日発行

大坪 一甲府市横根町反田
大坪遺跡発掘調査報告書一

発行所 甲府市丸の内1の6の1 県文化課内
山梨県 遺跡 調査 団
印刷所 温故堂印刷株式会社

